会報 31

1992.4～1993.3

平成4年度

日本大学山岳部
桜門山岳会

会報 第31号

── 目　次 ──

平成４年度　日大山岳部活動報告 …… 平井伸明 … 1

平成４年度　桜門山岳会活動報告 …… 中嶋　啓 … 21

海外登山
　マカルーⅠ峰登攀記 …… 岡田貞夫 … 23

寄　稿
　ヒマラヤ遊覧 …… 新田　業 … 29
　悔しかったら、やってみな！ …… 山本　修 … 31

追　悼
　追悼 武藤正弘君 …… 皆川四郎 … 33
　都築力雄先輩を偲んで …… 高橋正彦 … 33
　平野隆司君を偲んで …… 原田　洋 … 34
　平野君との思い出 …… 樋山規夫 … 35
　櫛引鉄太郎さんの思い出 …… 皆川四郎 … 36

登山計画の近況
　ダウラギリⅠ峰登山隊1994 …… 37
　マッキンリー登山隊1994 …… 38
　チョー・オユー登山隊1994 …… 38
　チョモランマ登山隊1995 …… 39

編集後記 …… 41

▲初夏合宿 横尾にて

活動報告

平成４年度 (1992年4月～1993年3月)

部 長　平 山 善 吉
監 督　高 緑 繁 伸
コーチ　古 野　　淳
主 将　平 井 伸 明

部 員　4年　ＣＬ平井伸明　ＳＬ伊藤英彦
3年　梅田一義　大野敦史　谷 朝久
山田哲史　岩下 誠　日本 修
大越壮一郎
2年　斉藤大輔　大塚洋二　山本 泉
中村順哉
1年　武藤禎康　鈴木快美　中沢公彦
田中 輝　笠原裕子　田村幸英
西尾暁子　河治俊行　芹沢浩正
篠崎泰徳　鶴ヶ谷 肇

部 室　〒156 東京都世田谷区八幡山２－10－２

――平成４年度活動報告――

チーフリーダー　平井 伸明

全員の力を結集した南アルプス全山での合宿を終え、各々の成長した顔が４月部室に集まった。しかし、リーダー会にて年度方針について話し合うといった積極的な姿勢はなく、部員の指向の多様化が強まり、全員で行なう合宿や部の活動に疑問を持つ者も出てきた。このようなことにより、当面は１つ１つの山行、部活動をきっちりと行なうこと。部としての方向性は１つ１つ確実にこなしていく中で作り出していくこととした。何よりも「山における安全」については徹底して取り組んでいくこととした。

新人勧誘は２月頃より部会、コーチ会にて取り組んできた結果、15名の新人獲得という大成功を収めた。総人数28人という大部隊となり、部会において椅子の数が足りないといったうれしい悲鳴をあげるまでになった。

五月山行は４パーティーを出し、中でもフリークライミングといった今までにない計画も出た。五月という最後の積雪期になにもフリークライミングを、といった意見がリーダー会、コーチ会等で出されたがメンバーの意志は強く、それを尊重することとした。

初夏合宿は部員の半分以上が１年生という編成の中、いかに合宿を安全に行なうことが出来るかという事に終始した。ＢＣを涸沢とし、１年生には山の生活やすばらしさをわかってもらいたいという方針を打ち出し、内容的には雪訓、分散登攀というほぼ例年通りの形で臨んだ。定着合宿はほぼ満足のいく結果を得ることが出来、分散下山でここ２年間、失敗に終わっていた燕下山を２年生をリーダーとする隊が成功に収めたことは非常に頼もしく感じられた。

夏山合宿はほぼ例年通りのスケジュール、内容で臨んだ。入山においては２、３年生が１年生をうまくフォローし、無事にＢＣ入りを果たすことが出来た。定着合宿は昨年に比べ非常に好天に恵まれ、雪訓、分散登攀と満足な内容を得ることが出来、新しい試みとして三尾根の新ルート開拓等も行なうことが出来た。しかし、後半分散において１パーティーが下級生の負傷により下山となってしまったのは非常に残念であった。

夏山後半の個人山行は縦走、沢、登攀と多くの計画が出た。３年生による奥利根本流遡行は見事に成功を収め、フリークライミングツアーにおいては近年の我が部の最高のレベルより２ランクほど上のレベルにまで達する者も出てきた。奥利根の計画は岩下のかねてからの上越国境への思い入れが３年生３名のまとまりを生み、フリークライミングにおいては自己のレベルアップを目指そうとする意欲を非常に感じることが出来た。

後期が始まり、リーダー会では冬山の計画を決定することとなった。今年度前半の反省と今後について話し合う中、計画はなかなか進まず、幾度もの話し合いの中か

ら全員による槍集中へと計画を決定した。冬山の偵察は例年だと10月に行なっていたが、今年は10月を秋山山行とし、全員が山へ入ることとし、11月の大学祭シーズンを偵察にあてた。

秋山は多くの山行を出すことが出来、各パーティーは無雪期最後の山行を大いに楽しんだ。

冬山偵察山行は4パーティーを出し、初冬の槍ヶ岳をしっかりと偵察することが出来、上級生の冬山に向う姿勢が出来上がった。また、同時期に1年生による縦走を行なった。特に1年生女子3名による縦走は、山に対する積極的な姿勢を感じさせた。

富士山合宿は訓練に徹する計画とし、内容的には満足な成果をあげた。ただ、初夏、夏とは異なる富士山という場所において大人数で行なう訓練の方法について改めて考えさせられた。

冬山合宿は富士山以降、上級生2名が体調不良により参加出来ないこととなり、OBの方々にも参加をいただいて、表銀座、笠ヶ岳、中崎尾根の3隊による槍ヶ岳を目指す計画と決定した。表銀座隊は凍傷者を出し途中下山となってしまった。笠ヶ岳隊は見事にロングルートを踏破した。中崎隊はほぼ全員アタックに成功したが、数名体調を崩し渋い結果となった。冬山の結果はリーダー会の部員の実力の把握不足が一番の原因であった。

冬山合宿が終わり、4年生2名、3年生1名が引退し、山田を中心に新規リーダー会が発足した。

2月山行は下級生のレベルアップを目的とし八ヶ岳周辺にて行なった。

春山合宿は後立山を中心に前半、後半に分かれた山行を行なった。

この1年を振り返ってみて、部員の半数以上を下級生が占め、いかに合宿、個人山行、普段の日の部活動を行なうかに終始し、全体の把握という面において足りない部分が多々あったように思われる。技術的な訓練の面を例に上げてみると、訓練の量は下級生が多いといえど時間をかければこなすことは出来る。しかし、それらのことがいかに各人の身についているか。何よりもこれら各部員の把握、これが現状のように大人数の構成となった今、一番必要なことだと思う。これらのことが「決して事故はおこしてはならない」につながるはずである。

私が1年生の富士山合宿で骨折して以来、大きな事故はおきていません。事故を目のあたりにして知る者は現部員にはいなくなりました。これらのこと、またその他多くのことをいかに伝えていくか、これが今後の大きな課題であると思います。卒業するとどうしても学生の活動を客観的にしか見られなくなる傾向がありますが、積極的に学生の中に入り、一緒に山に登り、一緒に山について考える。私自身、がんばらなくてはと思っているところです。

最後に我々のために貴重な時間を割いていただいたすべての方々に感謝いたしますとともに、今後とも引き続きご指導をお願いいたします。

――平成4年度コーチ会報告――

ヘッドコーチ　古野　淳

平成5年度はコーチ会が若返ります。私のヘッドコーチも5年を経て馴れ合いの感も否めなくなってまいりました。次年度は、昭和60年卒、石川一郎がヘッドを務めることになります。1986年ヒマルチュリ、1992年マカルーに参加し、現役クライマーとして活躍中です。持ち前の堅実な性格で事故のないよう学生を引っ張ってくれることを期待しています。

平成4年度は、15名の新入生が加わり、近年まれな大所帯となりました。仲間が増えたことは喜ばしいのですが、リーダー会が部の運営面ばかりに振り回されて、伸び伸びとした計画を実行できないというジレンマにも陥っています。この問題は大学山岳部においては何十年も続いていることなのでしょうが、5～6年前のつぶれる寸前の活動と比べれば、嬉しい悲鳴というべきでしょう。今年度のリーダー会は、理系の忙しい学生が多いこともあってか、計画の検討に甘さが目立ちました。細かな内容をコーチ会に持ち越して検討せざるを得ないケースがしばしば見られ、コーチ会の回数も必要に増えてしまいました。なんとか良い計画にして実現させてやりたいという気持ちが先行してしまって、結果的にはそれがリーダー会の能力を低下させてしまった感もないわけではありません。計画のチェック、山行報告、クラブ運営指導が主な内容ですが、山行報告に関してはコーチ会までのわずかな時間でりっぱな仮報告書を提出するようになり、今後の会報発行やオリジナリティーのある部内報の製作にも期待がもてます。反省会もポイントはおさえているようですが、厳しく見れば、反省のやりっぱなしともいえ、特にトレーニング、健康管理およびコンティニュアス登攀等技術面の課題が持ち越されております。

初夏、夏山、富士山と訓練合宿は無難にこなしてきた

かに見えましたが、１年生の数に対して上級生の指導が行き届かず力量の低下は否めません。冬山は槍の頂上に全員を立たせたいという平井の強い希望で少々強引ともみえる計画をコーチ会で通してしまいました。表銀座パーティーは惨敗、笠ヶ岳パーティーはかろうじて槍へ到達しましたが、メインの中崎尾根パーティーも病人続出で、結果はけして満足の行くものではありませんでした。

この一年間は多数の１年生をかかえながらも平井の強力なリーダーシップで部をまとめあげ、冬山までなんとかこぎつけたという年だったように思えます。年が明けて山田が新チーフリーダーとして活動を始めましたが、新規リーダー会にとって、まずは現状の力量把握からはじめる必要がありました。それぞれのリーダー部員は、こだわりの魅力的な計画をたててみたものの、現実とは程遠い力量の不足を認識し、すべての計画はいったん白紙に戻り、春山は鹿島槍のピークアタックおよび後立山での後半分散を行いました。前半は好天で、一応の成果を収めることはできましたが、後半の分散は散々たる結果となり、あらためて大きな課題をかかえ、今年もまた新入生を迎えるに至っております。

旧コーチングスタッフは、学生の山行とは一旦離れますが、70周年記念登山に向けて、あらためて学生と共に海外登山にも参加できるよう指導を続けていきたいと思っております。この計画が現実のものとなるよう、諸先輩方のご指導の程、よろしくお願いいたします。

卒業後も、遙かな高峰にむかって山に対する熱いハートを忘れないよう、永遠の現役クライマーであって欲しいと願います。

記　　録

■五月山行

１．尾瀬スキー山行・至仏山アタック

期　　日　４月30日～５月３日

メンバー　Ｌ伊藤、梅田、大越、大野、日本、山本

４月30日　雨一時晴　鳩待峠→山ノ鼻ＢＣ

11時頃雨の中を鳩待峠からスキーをザックに付けて出発する。１時間程行った所で、なだらかな平地となったのでスキーをはく。山の鼻に到着してすぐにテントを張り、逃げ込む様にして無料休憩所へ入り衣類を乾かす。

５月１日　風雪～晴　スキー練習

朝から風が強く視界が悪いので、停滞とする。11時頃雪が小降りになったのでスキー練習へ向う。他に人もなく、練習に没頭する。

５月２日　晴　ＢＣ→至仏山

深夜、山本が吐いているのを発見。容態を尋ねると頭痛と吐き気がすると言う。翌日、食欲のない山本に薬を与えテントキーパーとして、他の隊員で至仏山アタックにスキーを付けて向う。急登の為、ツボ足でピークに立つ。ムジナ沢の下りは止まる時に転ぶものの、思ったよりスムーズに下れた。

５月３日　雨～雪　ＢＣ→鳩待峠

朝から雨。段々強くなっていく様子。山本は食欲がない。今年の尾瀬は天気が悪く、見通しがたたない。食後、メンバーの意見を聞き、下山を決定。出発の頃には雪となる。

２．尾瀬スキー山行・燧ヶ岳～会津駒ヶ岳

期　　日　５月１日～５月４日

メンバー　Ｌ中村、大塚

５月１日　曇時々雪　大清水→三平峠～長蔵小屋ＣＳ

道に雪はなくスキーをザックに付けて歩き出す。一ノ瀬から雪が出てきて一汗かくと、三平峠。ここからスキーをはき、尾瀬沼へ向う。沼の縁を通り長蔵小屋へ行き、ツエルトを張る。

５月２日　晴　ＣＳ→燧ヶ岳→1,888m先ＣＳ

夏道沿いにトレースが付いていて快適に進む。汗をかきかき登り、ツボ足で燧ヶ岳のピークに立つ。休憩をとり、いよいよ滑降。雪はザラメで頂上直下は急である。大杉岳からはなだらかな稜線。1,888地点からの下りで大塚のビンディングの調子が悪くなり、時間も遅いのでツエルトを張る。

５月３日　晴時々曇　ＣＳ→会津駒ヶ岳ＣＳ

早朝、雪が降っていて視界不良の為、待機とする。９時30分、晴れたので急いで出発。ツボ足で股下まで潜ってもがき、駒ヶ岳のピークに立つ。疲れていたが目の前の大斜面を滑らずに寝てしまうのは勿体ないと思い、１本だけスキーを楽しむ。

５月４日　雪時々曇　ＣＳ→駒ヶ岳登山口

朝、苦しくて起きてみると50cm程の積雪。９時まで待つが雪は止みそうになく、予報では明日も悪いと言うので、大戸沢岳へは行かず駒ヶ岳からの下山を決定。1,450mより下には雪はなく、みぞれ混じりの中を歩いて下山。

3．小川山フリークライミング

期　　日　5月1日～5月5日

メンバー　L谷、岩下

5月1日　晴　川端下→廻り目平BC

立川発8:30の電車に乗り、昼過ぎには信濃川上に着く。バスで川端下に行き、1時間程歩いて廻り目平到着。とにかく付近一帯、あちこちに岩場があり、その広大さに驚かされる。明日からのクライミングに胸が一杯である。

5月2日　曇時々雪　ガマスラブ、父岩、リバーサイドにてクライミング

6時出発。色々とエリアをまわって4本程問題なく登る。連休とあって、とにかく人が多い。あまりハングドッキングが出来ない上、トップロープをかけるのが難しい。おまけに午後から小雪が舞う寒さ。しかし、小川山ならではのバランスクライミングはとても新鮮である。

5月3日　晴～曇　屋根岩2峰南面「セレクション」、リバーサイドにてクライミング

朝から2人で登りまくる。今日は一段とクライマーも増え、空いたルートを探すのに一苦労。「セレクション」の様なロングルートは山登りが感じられ、とても楽しい。妙にクタクタになった1日であった。

5月4日　曇時々晴　水晶スラブ、左岸スラブ、父岩でクライミング

6時起床。小川山の朝は遅く、我々はいつも一番乗り。5.10のルートを3本登る。フリークライミングも縦走に負けず劣らず疲れる。足は下降してくると感覚はなく、手の皮は減ってしまう。今日は3時頃に早仕舞いとしてテントで休む。

5月5日　晴　父岩でクライミング後BC→川端下

父岩でクライミング。2人でトライするが、なかなか手ごわい。何度か落ちてやっと成功。その後、寒くなって来たので撤収。小川山に別れを告げ、バス停に向う。

4．後立山縦走・五竜岳～鹿島槍ヶ岳

期　　日　5月2日～5月5日

メンバー　LOB岡田、平井、OB石川

5月2日　曇時々雪　五竜遠見スキー場→五竜山荘CS

リフト終点を9時に出発。トレースも付いており、各自好きなペースで登る。コースは稜線直下が急登の雪壁である他は特に問題なし。

5月3日　濃霧～曇　CS→五竜岳→キレット小屋CS

朝、外を見るとガスと強風。9時にガスが晴れ出したので出発する。ピークまでは新雪が5㎝程乗っていて、いやらしい。下降は夏山と同じペースで下る。天気が良ければもっと良いのだが、文句は言えない。

5月4日　雪　停滞

明日には予報によると天気が回復しそうなので、停滞とする。

5月5日　快晴　CS→鹿島槍ヶ岳→大谷原

起きてみると外はドッピーカン。「やったー」と3人。八ツ峰キレットの核心部は懸垂20m1ピッチ。鹿島槍ヶ岳北峰は黒部側をまく。南峰直下はすごい風。耐風姿勢を繰り返しピークに立つ。

■初夏合宿

── 穂高岳涸沢定着 ──

期　　日　6月10日～17日

メンバー　L平井、伊藤、岩下、梅田、谷、日本、山田、大塚、斉藤、中村、山本、武藤、鈴木、塩見、菅野、中澤、田中、笠原、田村、西尾、河治、芹沢、篠崎、鶴ヶ谷、富田、磯部

OB高緑、岡田、松野、向笠、古野、山本(修)、　原田(雅)、渡辺(勇)

6月10日　晴　上高地→横尾

順調に明神、徳沢とこえ横尾へ。途中、新村橋でザックを置きケルン参拝へ。設営後は散策する者、トカゲをきめこむ者さまざまである。

6月11日　曇～雨　CS→涸沢BC

1年生は重荷をかついでの初めての雪の上。出発前の不安な顔もイチ、ニイの掛け声のもと、あっという間に汗だくに。昼すぎにはホテル日大のテント村が出来あがる。平井、日本、入山。

6月12日　快晴　雪渓訓練

総勢27名での雪訓。予定通り、ローテーションでどんどん行なう。雪質はあまりよくないが、充実した訓練を行なうことができた。帰幕後、BCより雪訓場を振り返ると1日の成果を表す2つのダイヤモンドを仰ぎ見ることが出来た。中村、入山。OB岡田、松野、向笠、古野、入山。山本、OB渡辺、下山。

6月13日　晴　分散登攀

①奥穂アタック　L平井、谷、梅田、日本、中村、塩見、磯部、富田、田村、西尾、芹沢、篠崎、OB向笠、原田(雅)

②北穂アタック　Ｌ伊藤、山田、岩下、斉藤、大塚、河治、武藤、鶴ヶ谷、中澤、田中、鈴木、笠原、ＯＢ岡田、松野

両パーティともに２ピッチで稜線へ。我々の掛け声がカールに響く。ピークでは地形と概念をみっちり指導。下降は例年より雪が多く傾斜がゆるいせいか、１年生もどんどんグリセードで降りてくる。菅野、ＯＢ高緑、山本(修)入山。

６月14日　曇　分散登攀

①北穂東稜→北穂→奥穂

Ｌ日本、大塚、ＯＢ山本(修)

②涸沢岳アタック　Ｌ平井、岩下、菅野

前夜より降り続いた雨は朝には止む。しかし稜線はすっぽりとガスにつつまれている。前穂東壁、北尾根、北穂東稜より奥穂の３パーティを出すが２パーティは悪天のため引き返す。天候を見計らい、レリーフ参拝を行ない、３名にて涸沢岳を往復する。

６月15日　曇～晴　涸沢→横尾⊃蝶ヶ岳

今朝の天候は雨のちらつく空模様。これ以上よくならないと判断し、分散登攀を諦めて横尾までＣＳをおろすこととする。しかし横尾が近づくにつれ晴れ出すではないか。設営後、蝶ヶ岳を往復し、さきほどまでいた穂高連峰や槍方面のパノラマを楽しむ。

６月16日　快晴　下山

①ＣＳ→蝶ヶ岳→大天井岳　Ｌ斉藤、大塚、田村、中澤、富田

②ＣＳ→上高地

６月17日　①ＣＳ→中房温泉下山

▲奥穂山頂にて

■夏山合宿

── 立山東面内蔵ノ助谷左俣定着 ──

期　　日　７月25日～８月５日

メンバー　Ｌ平井、伊藤、岩下、梅田、大越、大野、谷、日本、山田、大塚、斉藤、中村、山本、武藤、鈴木、中澤、田中、笠原、田村、西尾、河治、芹沢、篠崎、鶴ヶ谷、ＯＢ大谷、山本(茂)、渡辺(勇)

＜入山＞

１．薬師隊

期　　日　７月25日～28日

メンバー　Ｌ山田、大野、大塚、鶴ヶ谷、河治、武藤、ＯＢ大谷

７月25日　晴　折立→薬師峠

強い日射しの中を水をガブ飲みしながらやっとの思いで天場に着く。さすが薬師、登ってくる人の数も多いが、格好が夏山ＪＯＹしている。我々とはかなり違いが感じられた。

７月26日　晴　ＣＳ→スゴ乗越

薬師平から薬師岳への登りで雪渓を登る羽目になってしまった。多くの人のステップがあるとはいえ、こんなに雪があるのかとびっくりする。

７月27日　晴　ＣＳ→五色ヶ原

越中沢岳へは登り始めのトラバースが特に悪く神経を使う。五色ヶ原へは見えてからが遠い。１年生はフラフラになりながらやっとの思いで辿り着く。その後、その場で寝てしまった。

７月28日　曇～雨　ＣＳ→内蔵助ＢＣ

雄山付近より天候はくずれ始め、最低コルでは雨となる。ガスの中をゴルジュ入口へ。日本、谷のサポートをうけ、歩荷隊が張ってくれたフィックスづたいにＢＣへ。ＢＣでは皆が雨の中、外へ出て我々を迎えてくれた。

２．早月隊

期　　日　７月26日～28日

メンバー　Ｌ谷、日本、斉藤、中澤、芹沢

７月26日　晴　馬場島→早月小屋

早月小屋が水を使えないため、馬場島で水を１人あたり５ℓ入れるとザックは急に重くなる。１ピッチ30～40分しかもたない。それでも何とか小屋に着く。１年２名はつらそうだ。

7月27日　晴　CS→剣沢

本日は快調に高度をかせぐ。頂上にて写真を撮り下りに入るが、人が多く、時間待ちの連続。中澤が腰の痛みを訴えるが、がんばって歩いてくれ、早々に剣沢に着く。

7月28日　晴～雨　CS→内蔵助BC

2ピッチで最低コルへ。歩荷隊の協力のもと午前中にはBC入りすることが出来た。

3．大日隊

期　　日　7月26日～28日

メンバー　L平井、梅田、大越、篠崎、田中

7月26日　晴　登山口→大日小屋

立山駅で杉田旅館さんに今年もデポをお願いする。称名滝を見物後に出発。1年生は打合せでもしたかのように交互にバテる。大日平で差し入れのメロンにかぶりつき、残りの力をふりしぼり大日小屋へ。

7月27日　晴　CS→雷鳥沢

本日は確実に一歩一歩前へ進む。奥大日岳の下りがガレておりいやらしい。雷鳥沢が近づくと女子4人の日大コールがかかる。スキーヤーも多くいるので、ちょっと照れくさい。

7月28日　晴～雨　CS→内蔵助BC

雷鳥沢は2ピッチで登り切る。内蔵助山荘にあいさつ後、ゴルジュ入口へ。歩荷隊のサポートとうまく合流でき、フィックスに導かれながら確実にゴルジュを下る。

4．室堂隊

期　　日　7月27日～28日

メンバー　L山本、笠原、鈴木、西尾

7月27日　晴　室堂→雷鳥沢

観光客でごった返す中を雷鳥沢へ。昼には大日隊と合流する。9人の大部隊となり、午後はのんびりと過ごす。

7月28日

大日隊と行動は同じ。

5．歩荷隊

期　　日　7月26日～28日

メンバー　L岩下、中村

7月26日　晴　室堂→内蔵助山荘

一ノ越への道はすごい人で大渋滞。例年通りボッカ道を重荷にあえぎながら山荘へ向かう。

7月27日　晴　CS→内蔵助BC

前日のデポを回収後、BCへ。ゴルジュにフィックスを張りながら慎重に行動する。夜は2人だけのBCを楽しむ。中々おつなものである。

7月28日　晴～雨　各パーティのサポート

早月、大日と次々に本日入山。各パーティのサポートに向かう。ゴルジュの登り下りは毎度のことながら疲れる。

＜定着＞

7月29日　晴　BC整理

8:00メシの予定だが、ゾロゾロと7時頃よりテントから皆出てくる。朝食後、BC整理、三本歯フィックス、デポ回収の3つに分かれ作業開始。それにしても薪が少ない。毎年消費量が増加しているためだろう。

7月30日　晴　雪渓訓練

4パーティーに分け、カール底へ。大きなダイヤモンドを2面とり、歩行訓練より開始。かけ声の中、1年生の真剣な目がすばらしい。本日は腰がらみまで終了。ゴルジュの下降はフィックスの各支点に上級生がつき、1年生をどんどん下ろす。1年生はグリセードが例年よりかなり上手である。

7月31日　曇～雨　雪渓訓練

寒冷前線の通過のため、気温は低く、ガスがどんどん湧き、1年生の訓練終了後に下山とする。2時間で訓練終了。天候がどんどん悪化する中、BCに戻る。夕方のリーダー会にて、明日は1年生は休養停滞、2年生特訓はBC下の雪渓にて行なうこととする。

8月1日　雨　停滞

一日中、雨が降ったり止んだりを繰り返す。2年生特訓は、疲労していることと、雨による風邪等も考え、分散終了後に各パーティーの上級生のもと行なうこととする。本合宿初の雨らしい雨の一日。皆、テントの中で爆睡している者が多い。

8月2日　曇～晴　分散登攀

①一尾根　L山田、中村、中澤、河治

②二尾根　L谷、日本、芹沢、西尾

③主　稜　L梅田、大野、鶴ヶ谷、田中

④支稜左　L岩下、斉藤、篠崎、武藤

⑤支稜右　L平井、大塚、笠原

⑥丸山尾根　L伊藤、大越、山本、鈴木

すばらしい天候の中、大いに分散登攀を楽しむ。しかし帰幕時間に間に合わないパーティーが出てしまった。これは1パーティーずつにて通過する三本歯でのタイムロスによるものが非常に大きい。リーダー会にて、明日

より半分を雄山へ、半分を東面へ出すこととする。本日、山本(茂)、渡辺(勇)ＯＢが入山。

８月３日　晴　分散登攀

①二尾根　Ｌ梅田、山本、斉藤、鶴ヶ谷、ＯＢ山本(茂)

②主　稜　Ｌ山田、中村、中澤、芹沢

③丸山尾根　Ｌ平井、大塚、河治、田中、ＯＢ渡辺

④雄山縦走　Ｌ伊藤、谷、大野、大越、日本、岩下、武藤、篠崎、西尾、笠原、鈴木

昨日の打ち合わせ通り、半分を東面、半分を雄山へ出す。本日もすばらしい天候である。東面の３パーティーは順調に進み、13:00の目標時間には全パーティーが折立に到着。雄山隊は下界から登ってきたばかりの人々のきれいな姿に思わず見とれる奴もいる。ＢＣに帰幕後、２年生のザイルワークを入念に行なう。

８月４日　晴　分散登攀

①一尾根　Ｌ伊藤、大塚、武藤、篠崎

②三尾根　Ｌ谷、岩下、斉藤、ＯＢ山本(茂)

③主　稜　Ｌ大越、日本、西尾、ＯＢ渡辺(勇)

④丸山尾根　Ｌ大野、中村、笠原

⑤雄山縦走　Ｌ平井、山田、梅田、山本、芹沢、田中、鶴ヶ谷、河治、中澤

三尾根隊は初登ルートの左、南面のピナクルの左のＮ字型のクラックに新ルート開拓。グレードは 5.9程度とのこと。また、雄山隊が神社横で１本をとっていると一尾根隊がひょっこり尾根上に現れる。みんな「がんばれ」の大声援。大塚がおはらいをしている神主の横で「ビレー解除」の大声。これには思わず赤面してしまう。夜は合宿最後のキャンプファイアーで大いに盛り上がる。

＜後半分散合宿＞

１．黒部川上ノ廊下

期　　日　８月６日～11日

メンバー　Ｌ日本、中村、芹沢、鶴ヶ谷

８月６日　晴　黒４ダム→東沢出合

昨日の10日ぶりの下界の食事のためか１年生は本日、非常に元気。水量を見ると昨年より少なく行けることを確信する。

８月７日　曇～晴　ＣＳ→廊下沢出合

能ノ沢、下ノ黒ビンガと沢歩きを楽しみながら進む。下ノ黒ビンガは昨年、水量が多く通過出来なかったので非常にうれしかった。廊下沢出合によい台地があったのでそこを天場とする。

８月８日　晴～曇　ＣＳ→立石奇岩先

上ノ黒ビンガは水量も少なく問題なく通過する。金作谷には雪渓がかなり残っている。上部は渕となっており、泳いで通過。明日の台風を見込み、少しでも先へと立石奇岩先の台地まで進む。芹沢が岩魚を釣り、４人で分け合って塩焼きにして食べる。

８月９日　雨　停滞

朝から台風の影響で雨。水量がかなり増え天場近くまで来ていたので、山の方へ避難する。ラジオによると午後には日本海から秋田へと通過するとのこと。予想どおり雨は小ぶりとなり、水量も減ったのでもとの天場に戻る。

８月10日　晴　ＣＳ→ウマ沢出合

本日は台風一過のドッピーカン。Ｂ沢でザイルを出しただけで、あとは河原歩きを楽しむ。赤木沢に入ると水量はぐっと減りシャワークライミングを楽しむ。上部に天場がなさそうなのでウマ沢出合をＣＳとする。山椒魚がたくさんいて、焼いて食べてみると川魚の味がした。

８月11日　曇～晴　ＣＳ→折立下山

赤木沢は滝の連続するきれいな沢である。上ノ廊下を溯行した後ということもあり、二の沢がやけに小さく見え、どんどん進むことができた。稜線に出たあともどんどん進み、12時過ぎには折立に下山する。

２．北アルプス　金木戸川双六谷遡行

期　　日　８月６日～９日

メンバー　Ｌ梅田、大越、大塚、河治、田中、中沢

８月６日　晴

タクシーを降りて５ピッチほど林道を歩く。双六谷は大変美しく水はエメラルドグリーンに光っている。

８月７日　晴～曇　ＣＳ→キンチヂミ先

はじめは巨大な岩が沢を塞いでおり、乗っ越すのに苦労する。水量はかなり少ないものの石の上で滑って流される者もいた。本日はザイルはキンチヂミで一度使用する。あとは細引を多用する。

８月８日　晴～雨　ＣＳ→左俣林道

朝、釣りに出かけた河治が岩魚を２匹釣り、大喜びである。さっそく朝飯に加える。蓮華谷から上は水量は減るが美しさは変わらない。一本のときなど釜に飛び込んだりして遊ぶ。双六小屋手前より雨となる。台風の接近を知り、本日中に大ノマ乗越より林道におりる。

８月９日　雨　ＣＳ→新穂高下山

大雨の中、新穂高温泉に下山する。

3．白馬岳

期　　日　8月6日～7日

メンバー　L伊藤、谷、大野、笠原、鈴木、西尾

8月6日　晴　猿倉→頂上宿舎

天気は最高によく、暑さと寝不足でペースはあまり上がらない。大雪渓はステップが出来ており、歩くのみ。雪渓を登りつめ、お花畑に見とれていると間もなく頂上宿舎に着く。

8月7日　晴　CS→蓮華温泉下山

朝、霧の中を出発する。山頂で記念写真を撮った後は、白馬大池を経てスムーズに下山する。

■秋山山行

1．北ア、後立山縦走・針ノ木岳～白馬岳

期　　日　10月1日～5日

メンバー　L平井、中澤

10月1日　晴～曇　扇沢→針ノ木峠CS

扇沢で朝食を食べ出発。針ノ木大雪渓は3大雪渓の面影はなく、巻き道を行く。

10月2日　曇時々晴　CS→爺ヶ岳→冷池CS

コースタイム9時間半の所を、8時間半でカバーする。冷池CSで夕日が沈む剣をバックに、ご飯を食べるのは仲々おつなものであった。

10月3日　晴　CS→五竜岳先

鹿島槍ヶ岳北壁は5月山行で見たのとは、打って変わってただのヤブ尾根にしか見えない。八峰キレットは問題なく、むしろ前後のガレ場がいやらしい。

10月4日　曇～雨　CS→天狗山荘

10月5日　雨時々雪　CS→猿倉

2．北ア、折立～槍ヶ岳

期　　日　10月2日～5日

メンバー　L山田、田中

10月2日　晴　折立→薬師峠CS

タクシーに乗り、折立に着く。山は冬間近。朝は日が出ていてもかなり寒い。他の登山者と共に夏に登った樹林の急登を上がる。1年田中は最初から良いペースでとばす。3ピッチで太郎平に着き、のんびりしてからCSへ行く。

10月3日　晴　CS→黒部五郎岳→三俣小屋CS

黒部五郎は岩稜帯の登り下りで、所々細いリッジになっている。三俣蓮華岳は頂上に行かずトラバースルートを取る。小屋に着いた頃は暗くなる前だった。

10月4日　曇～雨　CS→槍ヶ岳→横尾

槍の肩に着いてから、すぐに空荷で槍のピークに向う。せっかく来ても何も見えない。横尾の手前で暗くなり、リヒトを出し慎重に歩く。樹林の中から灯が見えた時はさすがにホッとする。

10月5日　雨　CS→上高地

雨がかなり強く降り、寒い。のんびりと上高地へ向う。紅葉を見に来た、かなり多くの人とすれ違う。

3．谷川連峰、仙ノ倉沢西ゼン

期　　日　10月3日～4日

メンバー　L大野、OB大谷

10月3日　雨～晴　土樽→群大ヒュッテCS

大谷OBの車で土樽へ着く。そこから歩いて群大ヒュッテそばの平地にテントを張る。

10月4日　晴　CS→西ゼン→平標山→CS

第1スラブは前日の雨で岩が濡れており、右の草付きをフリクションをきかせて登る。西ゼンの核心、第2スラブはザイルを出し慎重に行く。その後はナメ滝と小滝の連続。頂上で体を乾かし下山。紅葉がとても綺麗であった。

4．戸隠連峰、裾花川

期　　日　10月3日～6日

メンバー　L大塚、芹沢

10月3日　晴　土倉→木曽殿アブキ

CSに到着後荷を置いて、芹沢は釣に、私は薪を拾いに行く。釣の収穫はゼロであった。

10月4日　晴～雨　CS→一不動避難小屋

CSを出発して、河原歩き。ゴルジュに入ってからも難しい滝はない。最奥の魚止めの滝で少し手こずる。ゴルジュを通過して河原を歩くと10m滝。大塚は右壁を登り、かなり手こずったが、芹沢は左壁をあっさり登ってしまう。一不動へ至る枝沢へ入り、「あと2時間キノコを採りながら、楽しいヤブコギだ」などと余裕でいたら、とんでもない延々のヤブコギだった。

10月5日　雨～雪　停滞

10月6日　晴～曇　CS→本院岳→宝光社

登山道は身の丈程のクマザサがかぶっていて歩きづらく、手でかき分けながら行く。P1尾根の下降はぬかるんでおり滑りやすく、ヤブをつかんだクライムダウンに終始する。

5．奥秩父、笛吹川

期　　日　10月３日～４日

メンバー　Ｌ日本、梅田、篠崎、西尾

10月３日　晴　西沢渓谷→笹平避難小屋

①ナメラ沢　Ｌ日本、西尾

ナメラ沢に入ってからも悪場はなく、ほとんどザイルは出さない。

②ヌク沢　　Ｌ梅田、篠崎

出合からはゴーロで順調に行く。大滝 360mはツルベで行き10ピッチであった。

10月４日　晴　ＣＳ→甲武信岳→東沢釜ノ沢→西沢渓谷バス停

甲武信小屋に荷物を置いてピークへ向う。東沢釜ノ沢カゲンの滝では、釜で泳ぎを楽しむ。千畳ノナメでは、エアーマットなどですべって遊ぶ。

6．谷川岳、ヒツゴー沢

期　　日　10月４日～６日

メンバー　Ｌ岩下、伊藤、河治

10月４日　晴～雨　谷川温泉→二股→ヒツゴー沢→二股

ヒツゴー沢は始めの15m７m滝でザイルを出しただけで、後は簡単。滝が終わるとゴーロ登り。水のない沢を登り、尾根に出る。下山は天神尾根を下り、いわを新道に入り、ＣＳに戻る。

10月５日　雨　停滞

10月６日　晴　二股→谷川温泉

今日はオジカ沢だと張り切っていたが、ガスが晴れてみると稜線が真っ白である。仕方がないので中止として下山となる。

7．安達太良山

期　　日　10月10日～11日

メンバー　Ｌ山本、笠原、ＯＧ原田

10月10日　晴　奥岳→くろがね小屋

タクシーで奥岳まで入り、歩き始める。体が浮きそうな強風である。勢至平からは紅葉を見ながらの平坦な道を行く。くろがね小屋に着き、強風の中、苦労しながらテントを張り、小屋に風呂に入りに行った。

10月11日　晴　ＣＳ→安達太良山→野地温泉

小屋からゆるい登りを紅葉を見ながら登る。歌い出したくなる気分だ。安達太良山で景色を堪能した後に下山するが、途中で道に迷い、ぬかるみに足をとられ、やっと野地温泉へ。500円払って入ったお風呂は「子宝の湯」だったそうな。ありがたい。

■冬山偵察山行

1．表銀座

期　　日　10月30日～11月２日

メンバー　Ｌ梅田、大越、大塚

10月30日　晴～雪　中房温泉→2,699m手前

燕山荘に着く前から、天候が急激に崩れてくる。燕岳往復後に大天井へと向かうが、風雪に加え雷も鳴り始め幕営とする。夜から朝にかけ30～40cmほど新雪があった。

10月31日　雪～晴　ＣＳ→西岳ヒュッテ

朝、風雪のため待機していたが、8:00頃より視界がきくようになり出発。本日は大塚の体調がすぐれず、大天井は梅田、大塚で巻き道、大越に稜線通しに行ってもらう。西岳ヒュッテには4:00頃にようやく到着する。

11月１日　雪～曇　ＣＳ→横尾

大塚は本日もまったく大越につけない。そのため１ピッチ行ったところで天幕を張り、梅田・大越で大槍ヒュッテまで偵察。帰幕後、一気に水俣乗越より横尾へ下降。

11月２日　晴　ＣＳ→上高地

快晴の中、上高地へ下山する。結局、一度も槍のピークを見ることができなかった。

2．裏銀座～槍ヶ岳

期　　日　10月30日～11月３日

メンバー　Ｌ平井、大野

10月30日　晴～雪　七倉→烏帽子小屋

ブナ立尾根の取り付きで、２人は30匹ほどの猿の軍団に囲まれる。夜行の眠気も一気に吹き飛ぶ恐ろしさであった。2,000m付近より積雪があり、昼前には風雪の中、小屋に飛び込む。

10月31日　雪～曇　ＣＳ→野口五郎小屋

昨夜からの風雪が朝になっても続いている。天気図では西高東低がバッチリと決まっているが渤海付近にＬがあり、疑似好天を予想する。案の定、昼前より天候は少し回復。少しでも前へと五郎小屋まで行動する。小屋手前では再び風雪の中となる。

11月１日　雪　停滞

外は非常に大荒れ。しばらく待機とするが、10時には停滞決定。

11月2日　晴　CS→双六小屋

ピーカンの中を出発。やはり槍を見ながらの縦走はすばらしい。ルート的には水晶手前の岩稜が雪の付きも悪く、いやらしい。本日は日没ギリギリまで行動する。

11月3日　晴～曇　CS→新穂高下山

西鎌の岩場はまだ雪の付きが悪く、ザイルを2ピッチほど使用する。中崎尾根に伊藤パーティーのトレースを見つけ楽に下降する。最後はリヒトを点け、林道を歩く。

3．錫杖岳、笠ヶ岳

期　　日　10月31日～11月4日

メンバー　L山田、日本、斉藤

10月31日　雨　槍見→錫杖沢岩舎

雨の中を出発。クリヤ道より錫杖沢出合に下り、南峰のコルを目指す。重荷のためか、なかなかペースが上がらない。本日は岩舎に天幕を張る。

11月1日　雪　BC⊃南峰手前

上部は天場が限られることより、岩舎をBCにして軽荷で出発。ホワイトアウトの中をコンパス、地図、ルート図を用いてルートを確かめながら進む。しかし南峰手前の三本槍の尾根に出てしまった。明日再度、南峰のコルを目指すこととする。

11月2日　曇～晴　BC⊃南峰

本日はスムーズに南峰のコルへ。尾根は大木がすごく、木の上を歩いて南峰、大木場の辻へと進む。西尾地尾根も同じ状況である。今までトレースされていないことを納得させられる。下降しながら明日より笠ヶ岳へ移行することを考える。

11月3日　晴～曇　CS→笠ヶ岳山荘

今山行中で一番の天気。ジグザグのクリヤ道を進む。とにかくクリヤの頭が遠い、遠い。クリヤの頭、雷鳥岩は左から通過。稜線に出ると風、ラッセル共に強くなる。頂上に着くころには真っ白で何も見えなくなる。

11月4日　曇～晴　CS→新穂高下山

笠ヶ岳新道への下降は最初のところは雪崩そうな斜面である。樹林帯の急登をどんどん下る。暗くなる前には林道に出る。

4．槍平→槍ヶ岳

期　　日　10月31日～11月3日

メンバー　L伊藤、岩下、山本

10月31日　雨　新穂高→槍平

デポ缶をしょって出発。山本もよく頑張った。

11月1日　曇～雪　CS→肩ノ小屋

小雪が舞う中を出発。予定通り南岳西尾根の偵察に向かうが、状況が悪く、飛騨沢より一気に肩ノ小屋に入ることとする。すばらしいペースで肩に入る。

11月2日　晴　CS⊃槍ヶ岳

朝から山本の体調がすぐれず、伊藤、岩下にて中崎JPの偵察に行く。フィックスロープが残っており、登りで2～3級ぐらい。しかし冬期に重荷となると手強くなりそうだ。午後は山本も一緒に槍の頂上を踏む。

11月3日　晴　CS→新穂高下山

ピーカンの中を出発。すばらしい景色である。中崎尾根に赤布を確実に残し、新穂高に一気に下山。

■富士山合宿

― 富士山吉田口五合目定着 ―

期　　日　11月19日～24日

メンバー　L平井、伊藤、岩下、梅田、大越、大野、山田、日本、大塚、斉藤、中村、山本、武藤、鈴木、中澤、田中、笠原、田村、西尾、河治、芹沢、篠崎、鶴ヶ谷、川島、OB古野

11月19日　晴　中の茶屋→佐藤小屋BC

昨日の内に中ノ茶屋にて幕営した。天候は晴れ、冷たい空気がいやがうえにも我々の気持ちを引き締める。例年どおり大石茶屋で先発と後発に分ける。先発の偵察によると思ったほど雪はないとのこと。

11月20日　雨　停滞

昨夜半より降り出した雨が一日中降り続く。台風なみの集中豪雨である。テントの中は金魚が飼えそうなほどの水びたし。打つ手なし。ただ耐えるのみの一日であった。伊藤、山田入山。大野、山本下山。

11月21日　雨～雪　雪上訓練

昨日の雨はやがて雪へと変わる。昨日の影響で全員濡れねずみのため出発を遅らせる。七合目までの歩行訓練を行う。六合目より雪がついており、初めてアイゼンを履く1年生には丁度よい状態であった。

夜、岩下が腹部の痛みを訴える。どうも持病の結石が尿管につまったらしい。救急車をお願いし、伊藤をつけ発熱の篠崎も一緒に富士吉田におろす。中村、川島入山。

11月22日　快晴　雪上訓練

本日は大沢七合目付近にて雪訓。それにしても今年の

富士山は異常な人である。優に 300人以上はいるのではないか。あまりにも混雑しているので場所の確保が大変である。ザイルワーク途中まで終了。１年生は非常によくがんばっている。大野、ＯＢ古野入山。

11月23日　晴　雪上訓練

雪訓場所は昨日のとなりをどうにか確保。１年生はダイナミック、コンテのザイル操作に手こずっている。最後に上級生と１年生でザイルを組み、自由に付近をコンテにて歩く。１年生も少しはコンテの利用法がわかったようである。

11月24日　晴　下山

ゆっくりと撤収し下山開始。ケルンは昨年の経験から迷うことなくすんなりと見つける事が出来た。中ノ茶屋から浅間神社までは恒例の競走となる。

■冬山合宿

── 北アルプス槍ヶ岳集中 ──

１．笠ヶ岳～槍ヶ岳縦走

期　　日　12月20日～１月４日

メンバー　Ｌ山田、日本、斉藤、芹沢、鶴ヶ谷

２．中崎尾根～槍ヶ岳アタック

＜先発＞

期　　日　12月21日～１月４日

メンバー　Ｌ平井、伊藤、中村、田中

＜後発＞

期　　日　12月27日～１月４日

メンバー　ＬＯＢ家口、山本、武藤、鈴木、中澤、笠原、西尾、篠崎、ＯＢ田端

３．燕岳～槍ヶ岳（表銀座）縦走

途中下山後　中崎尾根～槍ヶ岳アタック

期　　日　12月23日～１月２日

１月２日～１月４日

メンバー　Ｌ梅田、大越、大野、河治、田村

１．笠ヶ岳隊行動

12月20日　曇　槍見→クリヤ谷岩小舎

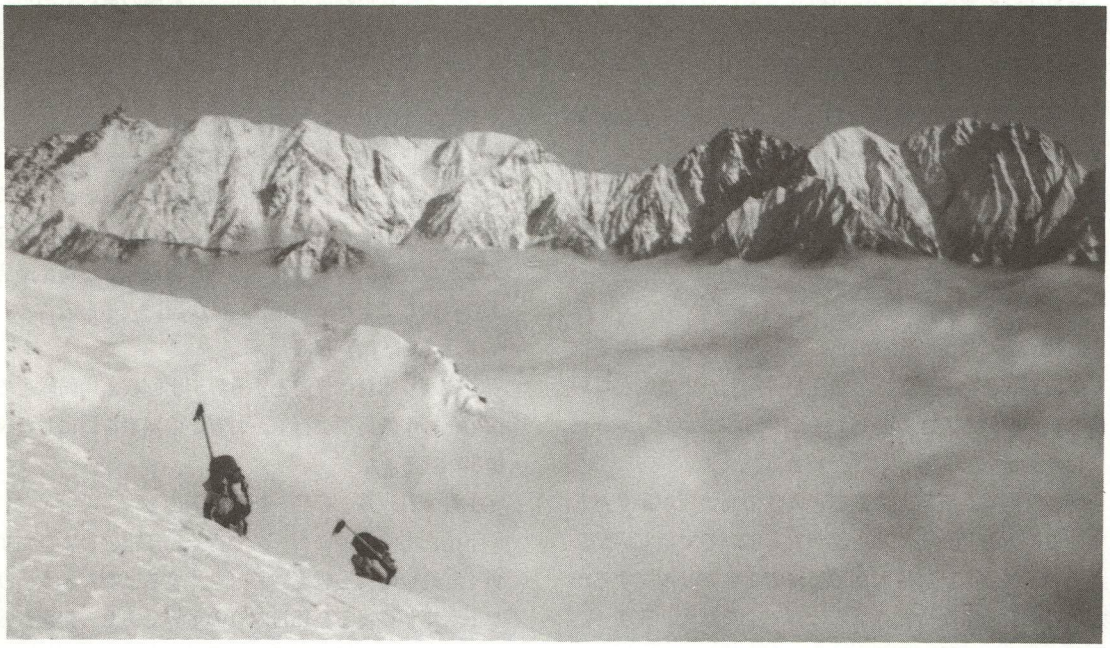
曇り空の中、槍見を出発する。赤布と先行のトレースを追ってラッセルする。１年生は重荷と不慣れなラッセルでペースはあまり上がらない。

12月21日　快晴　ＣＳ→2,140mＣＳ

我々が撤収している横を関西学院ＡＣのパーティーが通りすぎていく。日大と関学の合計10人の交替ラッセルとなる。予定通り 1,843mの左の支尾根に取り付く。とにかく急登で非常に疲れる。本日は天気もよく春山を思わせる陽気であった。

12月22日　曇時々雪　ＣＳ→2,250m

朝から雪がちらつき視界は良くない。とにかく雪が深く胸までのラッセル。 2,250mの岩峰は偵察後に日本、斉藤でルート工作。45mザイルを１本フィックス。最後



▲冬山合宿 笠ヶ岳隊 穂高連峰をバックに

のルンゼ状のところはザックが木に引っ掛かり緊張する。

12月23日　雪　CS→クリヤの頭

天候は下り坂。本日はクリヤの頭までと決め出発する。昨日の偵察時のトレースを利用し、クリヤの頭へ。外は真っ白、早急に天幕を立てる。

12月24日　雪　停滞

昨日からの風雪が強まり正にホワイトクリスマス。とにかく寒く、乾いた雪が深々と積もる。夜、気温は－20℃。身体を震わせながらシュラフに入る。

12月25日　雪～晴　停滞

次第に天候は回復してきたが次の天場、雪質、ルート等を考え、停滞とする。昼前より、山田、斉藤で首までもぐるラッセルの中、雷鳥岩まで偵察に行く。

12月26日　快晴　CS→笠ヶ岳山荘

5:20の交信で表銀座隊の残念な知らせが入る。中崎に中継し、我々ができることはとにかく無事に槍の頂に立ち、下山することと改めて確認する。アタックのみの関学のトレースを追い、笠を目指す。頂上が近づくにつれ強風となる。冬期小屋を雪掻きし中に天幕を張る。

12月27日　晴～曇　CS→双六小屋

クラストした斜面をコンテで快調にとばす。風は強いが雪庇もそれほどではなく、歩きやすい。秩父平よりワカンに替えラッセル。途中からペースも鈍り、また明日からの天候も考え双六小屋に入る。本日はよく歩いた。

12月28日　雪　停滞

低気圧の影響により外は荒れ狂っている。よい休養となり、1日のんびりと過ごす。

12月29日　雪時々曇　CS→樅沢岳

昨日より風は弱く視界はまだ良い。なんとか硫黄乗越までと思い出発。樅沢岳からの下降がわかりにくく、また風雪も強まってきたため断念。小屋に戻る。先に行きたいという気持ちが安全ということを越えてしまった。非常に反省する行動であった。

12月30日　雪　停滞

昨晩、空には星が出ており、もしかしたらと期待を抱くが、朝起きたらダメ。低気圧が停滞したまま動かない。皆もいい加減うんざりしている。リミットが迫ってきた。

12月31日　雪～晴　CS→硫黄乗越

朝またも雪。天気図を取ると大陸の高気圧が動きだしている。外を見るとなんと陽が射しているではないか。太陽の光が眩しい。樅沢岳の下降で1名スリップするが大事には至らなかった。2つのピークを越え、硫黄へ。明日はいよいよ槍である。

▲笠ヶ岳隊 槍ヶ岳山頂

1月1日　快晴　CS→肩ノ小屋→槍ヶ岳

快晴の中、槍に向け出発する。千丈沢乗越で中崎隊と合流し、握手を交わす。そこからはフィックスをつたい肩ノ小屋へ。槍ヶ岳へは鎖をつたい、最後はルンゼ状のところを蹴り込みながら頂上へ。最高の景色である。我々が歩いた笠の方に目をやると1年生は「遠～い」を連発する。リミットぎりぎり。9回裏2アウト満塁からのサヨナラホームランである。

1月2日　晴～曇　CS→槍平

肩からの下降である。風が強く飛ばされそうになる。中崎尾根に入ると風もおさまり、トレースもあり、スタスタと歩ける。槍平小屋へ入ると表銀座隊が新穂高温泉より入山してきた。明日、肩ノ小屋に入るとのこと。

1月3日　晴　停滞

予定通り本日は停滞とする。デポ回収と中崎隊との交信のため中崎尾根に行く。お互いの無事を口にした後、槍平へ戻る。

1月4日　曇　CS→新穂高下山

下山とあって速いペースで行く。無言のままひたすら歩く。最後の橋を越え、しばらくすると突然、人、ひと、ヒト。車が見える。15日ぶりの下界である。無事だった事にホッとし、皆で握手をする。

２．中崎尾根隊行動

12月21日　快晴　新穂高温泉→白出沢出合

駐車場にて体操し、いよいよ出発。林道にはトレースがついてはいるが、背中に35kg、腰のソリには20kg弱。正直言ってかなりきつい。黙々と歩く４頭のトナカイであった。設営後、ブドウ谷手前までソリを荷上げする。

12月22日　曇　ＣＳ→槍平小屋

前日のデポ地点でソリを回収し、我々はまた、トナカイとなる。本日より樹林帯となり、ソリは自分達の思い通りに一向に動いてくれない。滝谷出合にソリをデポし、平井、中村で先行し、槍平到着後、逆ボッカする。小屋内に天幕を張り、軋む身体を横たえる。

12月23日　雪　ＣＳ→2,388m手前

奥丸山横へ２回の荷上げを行う。強い風雪により、１回目のトレースが２回目には消されてしまう。樹林帯の広い尾根を進み 2,388m手前に天幕を張る。４時の天気図にてクリスマス寒波の到来を知る。

12月24日　雪　停滞

昨日の奥丸山横へのデポ回収に向かおうと考えたが、あまりにも天候が悪く停滞とする。男４人はシュラフの中でラジオのクリスマスソングを聴きながらイブを過ごす。

12月25日　曇～晴　デポ回収と荷上げ

天気図をとっていると突然外が明るくなる。奥丸山横へデポ回収に向かう。新雪はゆうに１mはあるだろう。回収後、 2,500mの最後のカンバの木まで荷上げを行う。帰りは赤布をつけながら帰幕する。

12月26日　快晴　ＣＳ⊃槍ノ肩

5:20の交信にて笠ヶ隊より表銀座隊の下山を知る。非常に残念であるが、今は我々の隊に集中しがんばろうと気を引き締める。 2,500m地点でデポを回収し先に進む。中崎尾根ＪＰ下は予定通り右から巻く。雪は安定しており問題はない。千丈沢乗越から肩ノ小屋まで 1,200mのフィックスを張る。帰りは夕焼けの笠ヶ岳を見ながら帰幕する。

12月27日　曇時々晴

先発：ＣＳ→槍平

ゆっくりと撤収し槍平へ。槍平小谷の雪おろしをし、後発を出迎える準備をする。

後発：新穂高温泉→滝谷出合

ゆっくりしたペースながら初めての雪の中での重荷、入山初日とあって１年生は結構アゴ気味であった。

12月28日　雪

先発：停滞

後発：ＣＳ→槍平

槍平より平井、伊藤でサポートに向かう。滝谷出合先で合流。天候は雨まじりの雪へと変わる。小屋内で今後の公共分配をした後はのんびりと過ごす。

12月29日　曇時々雪　ＣＳ→2,388m手前

元気なメンバーでどんどんラッセルを回す。ラッセルは膝上ぐらい。時おり槍、穂高の山々を雲の切れ間に見ることが出来る。先発時の少し先を天場とする。笠ヶ岳隊と交信できず。多分、双六小屋に入っているものと思われる。

12月30日　雪　停滞

朝、槍の方面は何も見えず。天候、メンバーの調子より停滞とする。天幕記録を書いたり、ラジオを聴いたりとよい休養となる。

12月31日　雪～晴　停滞

朝、外はホワイトアウト。 11:00過ぎよりドッピーカンとなる。すばらしい景色。雪洞の便所を作ったり、雪合戦をしたりと雪遊びに興じる。 12:20のシーバーにて笠ヶ岳隊が本日硫黄乗越に入ることを知る。明日はいよいよ肩ノ小屋である。

１月１日　快晴　ＣＳ→肩ノ小屋

先発と後発に分け出発。しかしペースは変わらない。中崎のＪＰはデポのフィックスロープを使用することなく西鎌に抜ける。千丈沢乗越にて笠ヶ岳隊と合流。先発隊のフィックスはところどころ雪に埋まっているがほとんど使用出来る。笠ヶ岳隊のメンバーは飢えており、砂糖をあげるだけで喜んでいる。

１月２日　曇　ＣＳ⊃槍ヶ岳

笠ヶ岳隊はリミットのため本日、下山開始。フィックスを張り２パーティーにて槍の頂へ。運悪くガスってしまい何も見えず。早々に小屋にもどる。北鎌から来るパーティーが我々のフィックスを使用するのには参ってしまった。不調の山本の体温が夕方になっても下がらず、明日は体調の回復具合により行動することとする。

表銀座隊（一時下山し、再入山）：新穂高温泉→槍平

新穂高温泉よりラッセルもなく快調に進む。滝谷出合を過ぎたところで笠パーティーと交信を行える。しばらくして合流。

１月３日　晴　停滞

朝になっても山本の体温は平熱にならず、行動不可能と判断し本日停滞とする。昼すぎに中崎尾根よりの表銀

座隊と合流する。夕方には山本の体温も平熱にもどる。明日はフィックス回収を表の３名に、外は一気に下山することとする。

表銀座隊：ＣＳ→肩ノ小屋⊃槍頂上

朝から快晴。チャンスがあれば本日中に頂上に立とうと気合を入れ出発。西鎌尾根は風が強く１年生はフラフラしている。小屋に到着後はすぐに頂上に向かう。ガッツポーズをして写真を撮り、確実に小屋にもどる。

１月４日　晴～曇　ＣＳ→新穂高温泉下山

朝、天気はいいのだが風が強く、１年生の下降は無理と判断。撤収後、待機とする。平井、ＯＢ家口で偵察する。飛騨乗越は風もなく、雪の状態もよい。また、明日からの天候やメンバーの体調を考え、飛騨沢を一気に下降することとする。フィックス回収は予定通り表銀座隊の３名にたのむ。半ピッチで駆け下り、回収組と合流後、新穂高温泉に下山する。

３．表銀座隊行動

12月23日　曇～雪　ＣＳ→中房温泉

前日のうちにタクシー最終地点に幕営。１年河治が下痢気味でどうも体調がすぐれない。明日は河治の体調の回復具合により行動を考えることとする。

12月24日　雪　停滞

河治は下痢はおさまったが胃の調子が悪く朝食を抜かせる。昨日の予定通り停滞とする。夜には顔色も良くなり飯も全部食べる。だんだんと良くなってきたようだ。

12月25日　雪～曇　ＣＳ→燕山荘

朝、河治の体温を計ると36℃の平熱。出発することとする。２日前の学習院大ＡＣのトレースは雪で消され、ラッセルとなる。下山者とすれちがった後よりかなり楽になる。夕方、笠パーティと連絡が入る。夕食後、さぁ寝ようという時になって河治が「凍傷になったみたいです」の一言。耳のへりに２㎝ほどの水泡が形成されている。すぐに今後の行動について話し合う。事故と判断し明日下山することとする。

12月26日　快晴　ＣＳ→中房温泉下山

気温が上がるまで待ち出発。梅田、河治は最小限の荷を持ち先行する。中房温泉の御主人に車で途中まで送っていただき、2:00には病院で診察を受けることができた。その後、河治は新潟に帰郷、他のメンバーは帰京する。

１月２日　曇　新穂高温泉→槍平

中崎尾根隊をサポートするために、梅田、大越、大野、田村で東京を出発。１月４日、中崎隊と下山。

■２月山行

八ケ岳・集中

①北部縦走～赤岳鉱泉定着

（ピラタスロープウェー入口～縞枯山～赤岳鉱泉）

期　　日　２月14日～21日

Ｌ山田、大野、岩下、田中、西尾、鈴木

２月15日　晴　ピラタス山麓スキー場入口→縞枯山→麦草ヒュッテ

スキー隊とほぼ同行動をとり、トレースのついたスキー場横の登山道を登って行く。天気は良いが気温は低く、かなり寒い。縞枯山周辺は北八ヶ岳らしい、のんびりとした落ち着いた所である。

２月16日　晴～雪　ＣＳ→天狗岳→夏沢峠ＣＳ

朝のうちは天気は良いが、午後からは崩れてきそうな雲行きである。夏沢峠までは樹林をぬっての歩行となり、降雪直後は苦労しそうな所だ。天狗岳は西天狗岳をピストンで登っている頃から雪が散らつき始める。

２月17日　雪　停滞

二ツ玉低気圧の影響を受け風雪が強い。今日、下山して行くスキー隊を見送った後、天幕でのんびりと過ごす。

２月18日　曇～晴　ＣＳ→赤岳鉱泉

朝のうち視界はそれ程よくはないが、天候は回復に向かっており、青空も見えてきた。風が冷たく、眼鏡も凍りついてしまい歩きづらい。硫黄岳からの下降で下降路が分かりにくく、時間を喰ってしまう。赤岳鉱泉へ向かう尾根の下部は前日の雪でかなりのラッセルとなり、途中ルートを外し、ラッセルに多くの時間を費やしてしまった。赤岳鉱泉にて岩下や定着隊のメンバーと合流する。

２月19日　曇　阿弥陀北稜登攀

阿弥陀岳のアプローチとなる行者小屋まできれいに道ができているがその先は全くなく、かなりのラッセルを強いられた。登攀中は風が強く、しかもかなり冷たい。震えながらビレイをする。足の冷たさを訴える者もいて急いで下降する。

２月20日　晴

・ジョウゴ沢にてアイスクライミング　山田、西尾

・赤岳主稜登攀　大野、岩下、田中、鈴木

前日までの調子を考慮してメンバーを選び、二つに分けることにする。天気も良く絶好の登攀日和となる。赤岳主稜のパーティーは前半はラッセルに苦しめられながら、順調に登攀してくる。

２月21日　曇〜雪

ジョウゴ沢にてアイスクライミング→下山

朝から空はどんよりとしている。全員でジョウゴ沢へ向かう。滝の近くで雪洞を掘ったりしながら楽しく過ごす。その後ＢＣに戻り、定着隊と一緒に下山する。

②スキー縦走（雨池峠〜天狗岳〜本沢温泉）

期　　日　２月14日〜17日

Ｌ山本、梅田、日本、篠崎、田村、河治

２月15日　晴　ピラタス山麓スキー場入口→縞枯山→麦草ヒュッテＣＳ

登山口からスキーを着用するが、道が途中からアイスバーン状態になり、アイゼンに替える。樹林の中を登下降する。今日はゆったりとしたペースであった。

２月16日　晴〜雪　ＣＳ→天狗岳→夏沢峠ＣＳ

このメンバーのほとんどがスキー未経験者のため、仲々ペースが上がらない。急登でかなりの苦労をしながら登って行く。中山山頂では遠くの山々がよく見える。中山峠から岩が出てきてアイゼンに履き替えて、縦走隊と合流して天場まで行く。

２月17日　雪　ＣＳ→本沢温泉→稲子湯

朝から雪。今日は下山ということで寒い中撤収する。急下降の道を下った後、ゆるやかな道になり、湿った雪に身体がかなり濡れてふるえがくる頃、稲子湯に到着。ゆっくりとお湯につかり、ほっとした気分になる。

③赤岳鉱泉定着（八ヶ岳西面登攀）

期　　日　２月14日〜21日

Ｌ斉藤、大塚、芹沢、中澤

２月14日　晴　美濃戸口→赤岳鉱泉ＢＣ

“バレンタインデーは八ヶ岳”というお決まりのコースである。男４人で鉱泉までの道をゆっくりと歩く。八ヶ岳西面を見ながらのんびりと歩くというのもいいものだ。

２月15日　晴　石尊稜登攀

アプローチで取付を間違えてしまい、時間を喰ってしまう。最初は嫌らしい草付きで緊張する。10ピッチ程ザイルを伸ばし稜線に抜ける。その後、地蔵尾根をシリセードしながら下降する。

２月16日　晴〜雪　ＢＣ→赤岳→ＢＣ

文三郎道の急坂を登りつめたＪＰのあたりから左へトラバースして取り付く。８ｍくらいの凹角を登り、そこから４ピッチ雪稜、核心の上部は右から回り込みクラックを登る。

２月17日　雪　停滞

低気圧の通過で雪が深々と降っている。いい休養停滞となる。

２月18日　曇〜晴　中山尾根登攀

中山乗越から膝上のラッセルに苦しめられる。少し登るうちにルートが間違っていることに気付き、一旦引き返すが時間切れの敗退となる。

２月19日　曇　中山尾根登攀

昨日の雪辱戦として、もう一度取り付く。上部の核心をなんとか抜け、雪稜を４ピッチ登った後、右へトラバースし縦走路に出る。

２月20日　晴

・小同心クラック　斉藤、芹沢

・中　山　尾　根　大塚、中澤

昨日行けなかった大塚、中澤が中山尾根へ。斉藤、芹沢は小同心クラックを登る。小同心は取付までのトラバースで緊張するが、後は順調にザイルを伸ばす。中山尾根は、斉藤たちが残したビナを回収しながら登る。

２月21日　曇〜雪

・小同心クラック　大塚、中澤

・山田らと同行動　斉藤、芹沢

小同心クラックを登った後、下降する頃、雪が散らつき出す。ルートを確かめながら地蔵尾根を下降し、ジョウゴ沢へ行きＢＣに戻っていた斉藤、芹沢、そして山田らと合流し、一緒に美濃戸へと下山する。

八ヶ岳西面の登攀において２年生部員１名が凍傷にかかってしまった。登攀中、実力以上に行動したために、その無理が形になって表われた。それ以前の冬山合宿においても凍傷を１名出しており、反省をしたつもりであったが、それはあくまでもつもりであって、本当の意味での反省にはなっていなかった。我々の知識不足、技術的な未熟さ、考えの甘さが２月における事故につながったのではないだろうか。　（山田・記）

■春山合宿

── 前半合宿 ──

鹿島槍ヶ岳集中

１．鹿島槍ヶ岳赤岩尾根隊（赤岩尾根〜同ルート下降）

期　　日　３月19日〜22日

メンバー　Ｌ山田、日本、斉藤、中澤、田中、田村、鈴木

2．爺ヶ岳南尾根（南尾根～爺ヶ岳～鹿島槍ヶ岳～赤岩尾根下降）

期　　日　3月19日～22日

メンバー　L梅田、岩下、中村、大塚、芹沢、篠崎、西尾、河治

── 後半分散合宿 ──

3．北アルプス・表銀座（合戦尾根～槍ヶ岳～新穂高温泉）

期　　日　3月23日～29日

メンバー　L梅田、大塚、河治、田村

4．北アルプス・鹿島槍ヶ岳東尾根～遠見尾根

期　　日　3月23日～31日

メンバー　L大野、斉藤、中澤、芹沢

5．北アルプス・白馬岳双子尾根

期　　日　3月23日～26日

メンバー　L山田、岩下、中村、田中、篠崎

6．南アルプス・入笠山

期　　日　4月3日～4日

メンバー　L日本、平井、鈴木、西尾、OB山本(修)

1．鹿島槍ヶ岳赤岩尾根隊

3月19日　晴　大谷原→高千穂平

大谷原より西俣出合を目指して歩き始める。思った程ラッセルはなく、ツボ足で十分である。西俣出合より急登が始まるがトレースもあり、なかなかいいペースで予定の天場に着く。

3月20日　晴　CS→冷池小屋

安定した雪面にしっかりと蹴り込み、雪壁を越える。冷池小屋に着いて間もなく、爺ヶ岳隊がやって来た。

3月21日　晴　CS→鹿島槍ヶ岳→大谷原

鹿島槍ヶ岳の頂上をアタックした後、すぐに下降に移る。途中、懸垂下降を交えながら快調に飛ばす。

3月22日　晴　CS→鹿島部落

のんびりと朝を過ごし、天幕を撤収する。前半は無事終了することができた。

2．爺ヶ岳南尾根

3月19日　晴　扇沢→ジャンクションピーク

ゲートから1ピッチで登山道入口に着く。1年生が頑張ってラッセルをしていたのが印象的である。

3月20日　晴　CS→冷池小屋

パッキングが遅れるが、稜線上は特に問題はなく順調に進む。冷池にて赤岩隊と合流する。

以後、鹿島槍ヶ岳赤岩尾根隊と同行動。

3．北アルプス・表銀座

3月23日　快晴　中房温泉→第二ベンチ

ヒッチハイクをしながら中房温泉へ辿り着く。ラッセルもなく楽な一日であった。

3月24日　晴～風雪　CS→燕山荘

予報は昼から雪とのこと。とりあえず燕山荘までと決めて出発する。合戦小屋あたりから雪が散らつき始める。夜になるにつれて風雪が強まり、小屋が揺れるほどであった。

3月25日　風雪～晴　CS→大天井ヒュッテ

大天井の登りは直登ルートを岩峰を巻きながら慎重に行く。雪のつき方がいやらしくザイルを何度も出す。今日は天気の読みがうまくゆき、偵察も役立った。

3月26日　晴　CS→水俣乗越手前

朝から細い稜線を行く。1年生はいつになく真剣な顔をしている。赤岩岳の手前からは予想した通りいやらしい。途中1年生がスリップするが、止める。西岳からはスタカットの後、懸垂下降を6ピッチでコルに着く。

3月27日　快晴　CS→槍ヶ岳直下

今日はピークへ行けると気合を入れて行く。稜線はクネクネと曲がりくねって雪のつき方は一定ではない。所々きのこ雪になっている。綱渡りのようなスタカットを繰り返す。一日中スタカットをしていた気がする。気温が高く、肩の小屋へのトラバースに雪崩の危険を感じ、行動を打ち切る。

3月28日　晴～風雪　CS→槍ヶ岳→白出小屋

天気を考え、日の出前から行動する。雪はしっかりと締まっている。頻繁に落氷がある。槍のピークを踏んだ後、大喰岳を下降する。途中、視界がきかなくなり、コンパスを頼りに下る。ラッセルがきつく、とうとう新穂高温泉まで行くことができず、みんな意気消沈してしまう。

3月29日　雪　CS→新穂高温泉

昨日からの雪が積もり、60cmくらいある。ラッセルがきつく思うように進まない。湿雪のため全身ガチガチに凍りついてしまう。

◀春山合宿 表銀座隊
槍ヶ岳山頂直下

4．北アルプス・鹿島槍ヶ岳東尾根～遠見尾根

３月23日　快晴　大谷原→二ノ沢ノ頭

取付より雪がぐさついており、歩きづらいが途中よりトレースが出てくる。順調に進み、二ノ沢ノ頭まで行くことができる。

３月24日　曇～雪　ＣＳ→第２岩峰手前のコル

天気予報にて南岸低気圧の接近を知る。午前中に第１岩峰を越えることにし、しばらくコンテで行く。中央のルンゼ状になっている所をスタカットで抜ける。雪は安定している。１時頃より雪が強く降り出す。

３月25日　雪～晴　停滞

前線を伴った低気圧の通過で昨夜からひどい風雪。朝になっても一向に回復する気配がなく停滞を決定。テントのポールが折れていることが分かり、全員で除雪とポールの交換作業をする。

３月26日　曇～晴　ＣＳ→吊り尾根

前日の雪が天幕に凍りつき撤収に時間がかかる。第２岩峰はフィックスにより通過する。岩峰上からは鋭いナイフリッジを緊張しながら行く。キレットに行こうとするが引き返し、吊り尾根にて天幕を張る。

３月27日　曇～晴　ＣＳ→北尾根の頭

風は強いが快晴である。北峰の腹を巻いて夏道に出て下降する。岩峰をトラバースし、フィックスにてキレットの底に降り立つ。そこからまたフィックスし、キレットを越える。

３月28日　曇～雪　停滞

二ツ玉低気圧の接近により、本日はＳＴＡＹ。

３月29日　雪　停滞

冬型が決まり、朝から風雪。昼過ぎに除雪に出るが、80cm位積もったようだ。メンバーの２名が熱を出す。

３月30日　晴　ＣＳ→西遠見山先

２人とも熱は下がったが調子は今一つ。ゆっくりと進む。五竜では風が強いので、すぐ下降する。その後２人の足取りが更に重くなり危険と判断したため、八方尾根まで行く予定であったのをやめ、遠見尾根を下ることにする。

３月31日　晴～曇　下山

相変わらず２人の体調は良くない。何とか励ましながらゆっくりと下降する。アルプス平よりテレキャビンに乗り下山する。

5．北アルプス・白馬岳双子尾根

３月23日　快晴　二股→樺平手前ＣＳ

猿倉台地より沢を渡らずに小日向山より伸びている尾根に取り付く。とにかく暑い。汗びっしょりで小日向山への急登を行き、小日向のコルから樺平を目指す。一直線に上に向かって稜線が伸びており歩き易い。

３月24日　曇～雪　ＣＳ→白馬山荘頂上宿舎

多少曇りがちであるが尾根を抜けるまではもつであろうと読んで出発する。コンテ、スタカットを交えながら杓子岳の頂上に着く。１年１名が腹痛を訴える。早く小屋へ行くことを考え、先行してもらって天幕張りに行ってもらう。風雪が強くなり、先行パーティーの所まで行くことができず、両パーティーとも別々の天場で一夜を

過ごす。夜、天幕が風雪によりつぶされる。

3月25日　雪～晴　ＣＳ～白馬山荘

ほんのわずかな距離にある小屋であるが、風雪が強く、先へ行くことができない。昼を過ぎてからようやく視界がよくなるが、風は相変わらず強い。数歩ずつ先へ進むといった感じである。白馬山荘に着くと、天幕は埋まっており、小屋の方にメンバーの２人がいる。他の大学と一緒である。どうやら夜にテントが埋まり、小屋に逃げ込んだようである。

3月26日　曇～晴　ＣＳ～栂池

埋まった天幕を掘り起こし、荷物を取り出す。パッキングし直した後、すぐに下降に移る。白馬岳を越えるとガスが晴れ、気温が高くなってきた。稜線を飛ばし、やっと栂池にたどりつくことができた。

6．南アルプス・入笠山

4月3日　晴　青柳→入笠山キャンプ場

入笠山への標識を見ながら行くが道がなくなり、ヤブこぎをする。１時間ぐらいすると突然展望台に出る。雪は5㎝くらいしかない。夜はＯＢの持参した豪華な食事を食べる。

4月4日　晴～曇時々雨　ＣＳ→富士見

20分程で頂上に立ち、周囲の景色を楽しむ。林道を歩き、無事下山する。

＜春山合宿を終えて＞

２月山行における事故の後、リーダー会、コーチ会を通して今後の対応が検討された。話し合いを重ねた結果、当初予定していた計画を白紙に戻し、一から計画の作成に取り組むことにした。連日、部室にて部員全員と話し合いの機会を設け、二転三転しながらも最終的には後立山連峰での集中合宿となり、前半・後半と分けた形でのものとなった。全員で同じピークに立つことを目的とした前半合宿は天候にも恵まれ何事もなく終了したが、分散形式をとった後半の合宿においては、各隊とも惨憺たる結果となり、現状での力不足をもろくも露呈したものとなった。こうして２月山行、春山合宿と続けて失敗を繰り返した我々は、改めて部の現状を見つめ、問題点を浮き彫りにすることで、今後の活動への指針とすべく、話し合い、検討したのである。

前年度からリーダーのバトンを受けた新リーダー陣は、何名かが前年から引き続いてやっており、そうした慣れも手伝って、それ程多くは部の現状や方向性についての話し合いはもたれることはなかった。前年の冬山合宿の失敗があるにもかかわらず、相も変わらぬペースで、自分の足元をよく見ることもなく、流れに身をまかせて、２月山行、春山合宿へと進んで行こうとした。そうした結果は２回続けての失敗。それも少し間違えば取り返しのつかないことになってしまうものばかりである。この結果を踏まえて我々なりに考え、話し合ったことについて以下に述べていきたい。

まず初めに、今回というよりも、今までの合宿や山行での失敗の多くの原因は、様々なものが考えられるであろうが、一番の大きなものは部員の力、そして部全体としての力量、計画を作成するリーダーが把握していないのではないかということが考えられる。これだけ部員の数が肥大化してくると、一人ひとりを把握することは容易ではないが、多いからこそより細部に渡った力量の把握が必要となってくるであろう。勿論、計画を作成する際はメンバー構成、ルート等の様々な要素を考慮するのではあるが、それがどれくらい深く、十分な検討が成されているのかが重要となってくる。様々な角度から各部員を見ることによって今まで分からなかった個人の特性が見えてくるのである。そうした検討や話し合いが我々には不足しており、そういう場であるはずのリーダー会が、十分に機能していなかった。リーダー会では計画に検討を加える際、どうしてもチェックが甘くなり、メンバー一人ひとりに対しての細かな検討を行なうこともなく計画が作成されていた。情に流されてしまう部分がかなりあり、「行ける」というよりも「行かせてやりたい」ということの方が強くなっていた。また、リーダー各人が計画に対して判断するという力量も備わっていなかった。それは知識不足、経験不足によるもので、自分たちの判断をどうしてもコーチ会に頼ることになってしまった。そしてリーダー部員にも自覚の欠如があったように思われる。

こうしたリーダー会を十分に機能させるために話し合いの機会を積極的に作り、自覚を持って行動することを始めとした。今まで学校の都合等で全員が仲々集まることができなかったため、リーダー部員の変更も検討された。リーダー会では、お互いに情報交換、意志疎通の充実を図ることによって部内での現状をより的確につかめるようにし、山行の計画には各人がそれぞれの計画に対し、十分に理解し、検討ができるようにしなければならないとし、知識不足に対しては講義会の充実を図ること、経験の少なさはより積極的に山行を行なうことを対応策

とした。

次に下級生の指導がしっかりとなされていなかったのではないか、ということも考えられる。作られる計画は上級生の思惑がかなり強く前面に出てしまい、それに対応するだけの指導をしていなかった。計画に対し、段階を踏んでそれに見合うだけの力をつける必要があるはずなのだが、そのようなことをすることなく計画を作成し、実行に移していったのである。このことは先に述べた個人の力量把握と同じことであるが、一人ひとりをよく理解し、各人に合った指導をしてゆく必要があるだろう。

また、安全性に対する認識はどうだったであろう。これも甘かったと言わざるを得ない。山へ行く際には安全性に考慮しない者はいないだろうし、重要性は分かっているつもりなのだろうが、山行を何度も重ねるうちに危険に対する感覚が麻痺し、どうしても安全の限界を越えてしまうことがある。それが小さなミスのうちで終わっているうちはいいが、一つ間違えば大事故につながるものだけに、様々な角度からの計画の検討が必要であろう。また、危険性をより小さくするために各人がいかなる状況においてもそれに対応し、判断できる技術・体力・知識を持つことも不可欠である。そしてここにおいてもメンバー一人ひとりの力量把握が重要になってくるのである。

部員全体の力が不足していることは、こうした結果を見ても明らかなことであり、全体の底上げを図っていかなければならない。部員の肥大化そして志向の多様化により、部としての方向性をどう見つけてゆくかは、これからの課題となるが、我々が山を登る上での基本であるトレーニングをし、知識を得、山行を重ね、その山行の反省を基に次のステップへ進む。このことは変わらないだろうし、変えてはならないだろう。自分たちは、未熟であることを自覚し、より安全に登るために努力をしなくてはならない。

以上のようなことが我々なりに考えた部の現状であり、課題 ― 勿論まだまだ多くの問題があるだろうが ― であるのだが、これらのことはごく当たり前のことであり、当然考えられていなければならないことなのだが、それが今の我々には出来ていなかった。また、そうした対策をとるためのリーダーとしての力が自分にはなかったということは否定できないことであり、このことがこうした様々な失敗の原因のかなりの部分を占めるのではないかと思われる。

２月山行、春山合宿を通して潜在的にあった問題点が浮かび上がり、話し合ったことは不幸中の幸いであったかもしれないが、そこで得られた教訓を生かすも殺すも今後の我々の活動いかんにかかっていると言える。４月からは新しい仲間も加わり、さらに大人数になることが予想されるが、それだけにより一層、この経験を生かし、部員一人ひとりが自覚を持って山に取り組まなければならないだろう。

（山田・記）

▲鷹取山にて

■個人山行

・奥多摩　雲取山
5月3日～4日　L山田、斉藤、武藤、鶴ヶ谷、篠崎、三留
・奥武蔵　生川子持沢遡行
5月24日　L中村、大野、篠崎、菅野
・奥武蔵　生川大持沢遡行
5月24日　L斉藤、梅田、武藤、中澤、塩見
・丹沢　四十八瀬川勘七の沢遡行
5月24日　L岩下、日本、谷、河治、芹沢、田中、富田
・奥多摩、海沢遡行
5月30日　L梅田、日本、大塚、笠原
・奥多摩　水根沢遡行
6月21日　L梅田、日本、大野、大塚、芹沢
・谷川岳　衝立岩正面壁登攀
7月4日～5日　L OB山本(茂)、谷
・尾瀬　大清水～燧ヶ岳～鳩待峠
8月19日～21日　L山本
・越後下田山塊　五十嵐川光来出沢遡行
8月19日～23日　L梅田、大越、笠原、河治
・クライミングツアー
豊橋・立岩、佐久・湯川、榛名・黒岩
8月20日～24日　L斉藤、武藤
・上信越国境　魚野川本流遡行
8月19日～21日　L大野、岩下、大塚、芹沢、篠崎、鶴ヶ谷
・八ヶ岳縦走　蓼科山～夏沢峠～赤岳～編笠山
8月20日～24日　L中村、田中
・南ア　尾白川黄蓮谷右俣遡行
8月25日～27日　L日本、山田
・南ア　北岳バットレス登攀
8月27日～31日　L山田、平井、日本、田村、鈴木
・南ア　白峰三山縦走
9月1日～3日　L山田、大野、田村、鈴木、中澤
・北ア　黒部 丸山東壁登攀
8月26日～28日　L OB山本(茂)、谷
・北ア　白馬岳縦走
8月28日～30日　L大塚、山本
・奥利根本流遡行
9月1日～7日　L岩下、梅田、大越
・谷川連峰　湯檜曽川本谷遡行
9月6日～7日　L大塚、日本、西尾
・奥秩父縦走　甲武信岳～雲取山
10月31日～11月3日　L鈴木、笠原、西尾
・奥多摩　雲取山
10月31日～11月2日　L武藤、田中、河治、芹沢、篠崎、鶴ヶ谷、田村
・上州　二子山
10月25日　L平井、山田、斉藤、川嶋、鈴木
・富士山
12月5日～6日　L平井、山田、篠崎
・八ヶ岳登攀
2月27日～28日　L OB岡田、西尾、川嶋、OB家口

■岩登りトレーニング

日和田山	22回	二子山	2回
河又	7回	亀の甲岩	1回
榛名黒岩	4回	小川山	3回
氷川屏風	2回	広沢寺	3回
女ガ岩	2回	越沢バットレス	2回
鷹取山	5回	Tウォール	3回＊
マコ岩	1回	アルピン	2回＊

＊は人工壁

桜門山岳会

― 平成４年度　活動を顧みて ―

桜門山岳会理事長　中嶋　啓

平成４年度も、昨年度同様に日本大学山岳部も桜門山岳会も平穏な一年で終わり、平成６年度に迎える日本大学山岳部創立70周年記念事業へと邁進したい所でした。しかし、総会直前（４月１日）の役員（理事）会の席上において、理事長忌避発言があり、未だ十分な解決が得られずにおり、《誠に残念な一年であった》と言わざるを得ません。

そのような中で迎えた年次総会では、53名のＯＢ諸氏が集まり、学生27名を加えると80名の大所帯の総会であった事が年度末に生じた一連の騒動の不快感を多少和らげてくれました。

平成４年度は平成６年に迎える、日本大学山岳部創立70周年記念事業を念頭に進めると共に会員間の情報（親睦）を図るため、桜門山岳会短信では毎号・記念行事（案）を提示し、事ある毎に返信ハガキなどで意見聴取してきました。

その中でも、日本大学山岳部らしい行事（式典）を望む声が多く見られました。

今年も、会報・名簿を発行し、会員各位に配布する一方、各種の募金（山岳部、マカルー登山隊、初見一雄《追悼文集》）をお願いしましたところ、多くの協力を頂き、それぞれ募金目標を達する事が出来ました。

一方、理事会は役員（理事）会は出来るだけ多くの方々に出席を願い、平山部長の尽力（研究室の使用）もあり、隔月開催に努力して来ました。

役員会への出席状況は、戦前および戦後（70～60代）の出席は良好でしたが、これからの桜門山岳会を担う年代（40～30代）の出席状況は不満の残る状況でした。

その一因として、戦前・戦後の方々との年代差を感じさせるのか？　仕事に追われているのか？　などが考えられますが、今後は若手ＯＢ（とは言っても、40～30代）の方々に期待すると同時に、70周年記念行事の中心的活動をお願いしたいと思います。

各種行事としては、

◎６月の剣沢集会には、悪天候にもかかわらず、23名の参加

◎秋季天幕懇親会（11月）には、学生22名を含め58名の大集会となりました。

会場の越後・八海山麓・理工学部研修セミナーハウスは余りにも立派な施設のため、平山部長からの苦言もあり、成功とは言えませんでした。

平成５年４月になりましたが、追悼文集の発刊を機に《初見一雄さんの会》が開かれ、桜門山岳会関係者30名の出席がありました。

桜門山岳会の親睦を図るには、懇親（山行）集会の開催も大切ですが、70周年記念を目前にしての役員会では、記念行事に関する事項はなかなか前進せず、年間の会合を進める立場として力量のなさに悶々とした一年でした。

70周年記念行事を実施するには会員各位の協力なくしては出来ません。私案として、役員会・短信等で周知（提示）して来た内容は十分とは思いませんが、桜門山岳会々員が一人でも多く参加出来る催し物にしたいものです。

一部には、お世話になった方々への恩返し論（日本山岳会・他大学の山岳部など）もありますが、日本大学山岳部創立70周年の行事です、山岳部の学生を軸として、ＯＢの半数近い人達（返信を頂く方々）が参加できる式典を開催したいものです。

記念事業の私案としては、次のような事を考えておりましたので、勝手ながら述べさせて頂きます。

１．目的

創立70周年をＯＢ・学生を中心として、日本大学及び山岳会関係者を招き共に祝う。同時に、日本大学山岳部の次への出発点とするため、積極的に記念事業《①式典（祝賀会）②部報（歴史）③海外登山》を実施する。

２．記念行事にかかわる経費は、自己負担の考え方で進める。

①式典（祝賀会）　ＯＢ出席者の会費で賄う

②販売経費で賄う

（例：5000円×500部＝2,500,000円）

③参加者の自己負担を中心に、桜門山岳会々員の募金で出来るだけ賄う。

今後も、70周年記念事業を考慮して、会員通知（周知）・会員名簿・会報・短信等の発行を図り、次の事を念頭に進めなければならないと思います。

1．記念行事の経費は…

2．桜門山岳会のフトコロは…　現状の終身会費制で（1人50,000円）で、今後、財政的に十分なのか？

一方、学生の確保（部員募集）問題は重要であり、現状で満足する事ではなく、地道に努力して行かねばならないと思います。

今は満足な部員数を保っておりますが桜門山岳会は、学生山岳部があってこそ成り立つ集団だと思います。

これからも学生への理解を深めると共に、会員が気楽に参加のできる集会を少しでも多く開催し、山に足を向けなかった仲間が、2,000mの山に集まるようになり、次は3,000mの山に集まり、そして少しでも高い山で集まる努力をお互いにして、日本大学《山岳部・桜門山岳会》らしい70周年記念行事が楽しく、盛況の内に出来る事を願って一年を顧みました。

平成5年度の各種の行事（集会など）へのご協力も引き続きお願いします。　　平成5年6月10日

平成4年度（桜門山岳会）活動経過

平成4年5月～平成5年4月、（　）内；学生

会	回	月日	場所	主な内容	出席者
理事会	1	6.10	日大・理工学部　平山研究室	事業計画及び行事担当決定，部員増に伴う募金，70周年に向けて	13
	2	8. 6	日大・理工学部　平山研究室	70周年記念行事準備会メンバーの決定	14
	3	10. 1	日大・理工学部　平山研究室	山岳部創立70周年に向けて（記念式典，部報の発行，海外登山）	21
	4	12. 3	日大・理工学部　平山研究室	70周年記念行事に向けて，各ブロック担当の決定	16
	5	2. 4	日大・理工学部　平山研究室	平成4年度総会について，70周年に向けて（進捗状況等）	15 (1)
	6	4. 1	日大・理工学部　平山研究室	平成4年度総会について（役員改選，記念行事等）	14
	臨時	4.22	日大・理工学部　平山研究室	平成5年度桜門山岳会役員（案）決定	17
催し事	6.20～21		剣沢懇親集会	悪天候にもかかわらず，戦前のOBも多数ご参加頂きました。	23
	6～8月			部員増に伴う募金（84名 942,485円）	
	7.14		日大本部　地下食堂	雪豹クラブマカルー登山隊1992歓送会（募金69名 1,894,380円）	44 (6)
	9. 9		日大・理工学部　平山研究室	山岳部創立70周年記念行事　第1回準備会	11
	11.14～15		八海山麓理工学部ｾﾐﾅｰﾊｳｽ	秋季天幕懇親会	58(22)
OB動向	8～9月		中村 進，ＪＡＣ・ナムチャバルワ登山隊・報道班で参加		
	3.22～23		星野辰雄さんを囲んで静岡厚生年金休暇センター		10
	4.21		初見一雄さん「追悼文集刊行」の会 スクワール麹町にて		30 (2)
	2～3月		中村 進・大島育雄，ベーリング海峡徒歩横断		

海外登山

マカルーⅠ峰登攀記

岡田　貞夫

「ヒマーラヤはＧＯＤの国だ。でもこのエリアだけは別でマカルーの頂きにはＢＵＤＤＡが存在している」

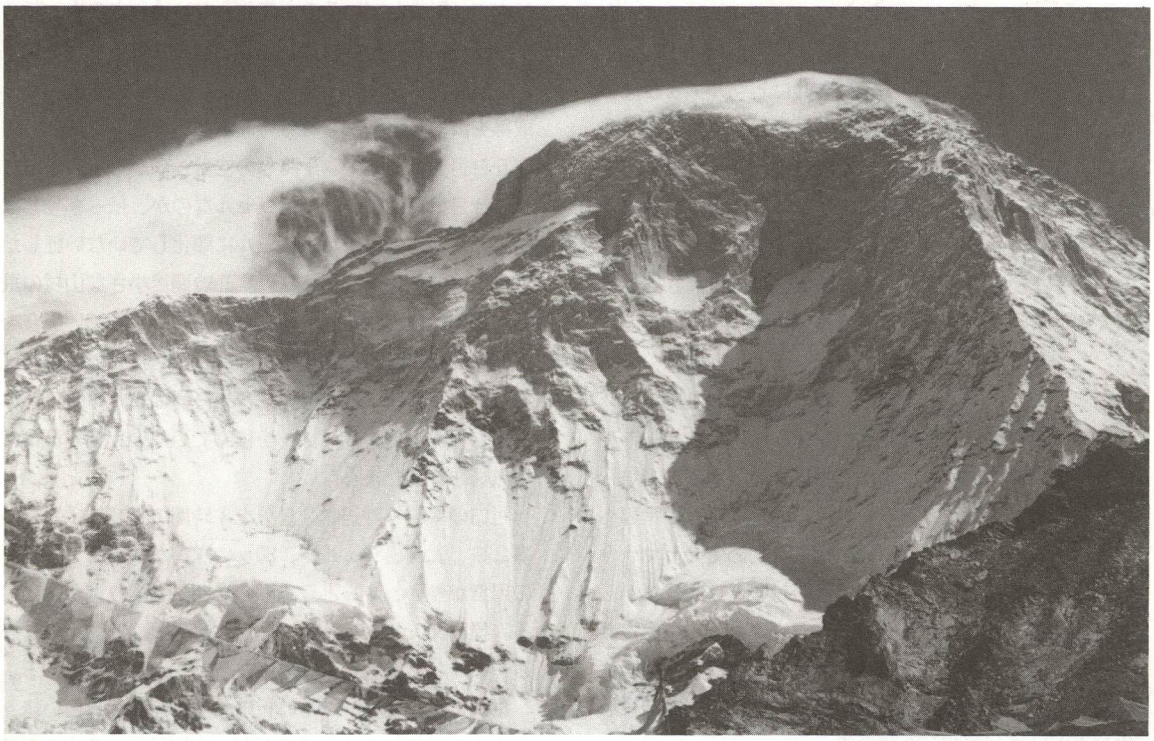
これはシェルパ頭が私に語ってくれた話しで、その言葉に不思議な感動を受けたことが記憶に残っている。

一人の仲間を失った悲しみは時を経て苦しみをともなってくるが、安易な遠ざかり方はしたくなかった。次なる計画を練る方向で村口と話し合っていた。 8,463mの未知なる高さを克服する研究とトレーニングを、よりシンプルに自由な立場で山を見つめる環境作りから始め、1989年「雪豹クラブ」の名前で登山許可取得の準備に入った。その頃の関心事に何人位が参加するか？　３～５人は欲しいのが本音であり、経験を積ませたい若いＯＢを強く熱望していたが残念な結果となった。学生の参加は初めから考えの中には入れていない。マカルーの高度は経験の少ない我々には彼等の生命を保護するだけの力はなく、事故発生の時、学生と社会人との差はあまりにも大きいと感じたからだ。

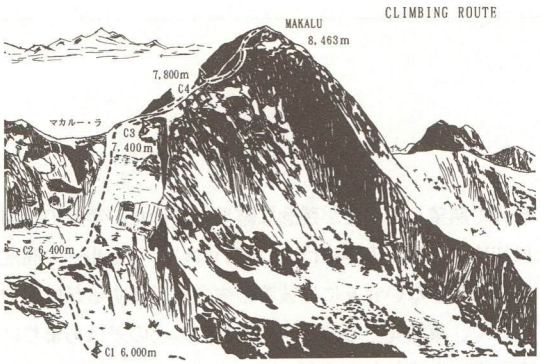
『ルートは絞られるが２人だけでやってみよう。結果も必要だが過程をより大切にする事が好きな我々らしい』

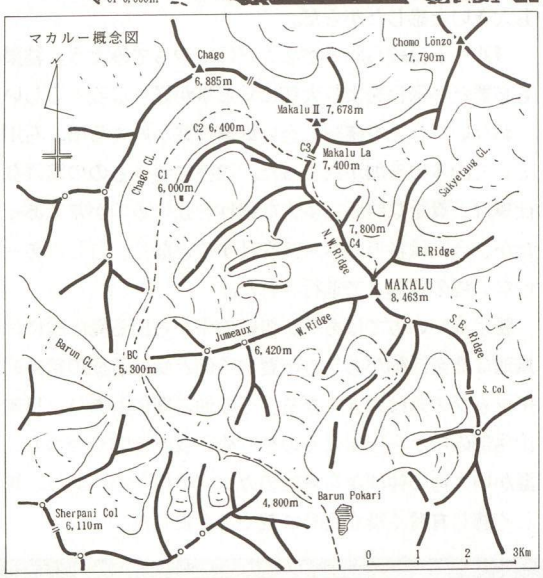
お互いの意志を確認し合い準備作業が始まる頃、石川そして山本の参加が決まった。遠征につきものの繁雑な仕事は、貴重な時間に多大な犠牲を強いるのが常であったが、今回は各自のペースを乱すことなく、むしろあっけない程の簡単さで進行された。

勝手ないい方ではあるが組織の中から出る登山隊には無理な募金活動があり、出費する側と受ける側の精神的ギャップの差は大きすぎる。その他の理由もあり、日本山岳部の中から出掛けるのをやめた我々と知りつつも、温かい大勢の仲間から多額のカンパの申し出があり、嬉しく感じ有難く役立たせて戴くことにした。



▲マカルー西壁（ＢＣより）





ここで我々４名を紹介します。

石川一郎　29才　　1986年私と共にヒマルチュリに参加し初めてながら 7,700m迄達した経験をもつ。無口で一見すると周囲には暗そうな印象を与えそうだ。本当の姿を知っている私には反論はできない。時折ボソボソと語りかける時のイッチャンは沈着冷静で我々３人をハッとさせる。仕事を任せたときの確実性は高い。されど酒が入った時の私が最低なら彼は最悪と化す。

山本修　30才　　自らザイルのトップに立ちナイフリッジ、雪壁登攀といった心拍数を上げるようなルート工作は好まぬ性格らしい。しかし世界一周放浪の旅で培った体験はすごく、ヒンドゥー教、チベット仏教の世界への融け込みかたは『さすが』の一言。初めてのヒマラヤ登山とは思えない程シェルパ達との付き合いがうまかった。身体がデカく、どこか彼の経歴を裏付けているようだが時折みせる悲しい表情は、彼のナイーブさを証明するのでは、と思っていたら、健康診断の結果、本当に心臓が小さいのが判明し全員納得。

村口徳行　36才　　卒業してからの10年程は職業欄は空白であった。最近とある結婚式に招待を受けた折、席次表に「国際的カメラマン」なる肩書に気を良くしたのか名刺を作った。私と３回共一緒に行動しているが互いに気が合う訳ではない。頑固者で私とぶつかり合うが年の功で私がおれる。遠征の経験は豊富でカトマンドゥーに多くの友人、知人を持ち、その人脈により毎回のことでもあるが今回の準備も全て一人でこなしてきた。今の日本では死語になってしまった「ビンボー」を現在でも実践しているめずらしい男である。

岡田貞夫　42才　　酒におぼれ、25mプールでも溺れる。出発一年前にはカレーパン２ヶを持っただけで椎間板ヘルニアが再発し１ヶ月の入院生活を送ったが不死鳥のごとく蘇った。店の仕事を妻と学生に託して日本を脱出してしまった最低の男である。

8,463mのマカルーはどの様にして登るか、またどの様にすれば登れるのかと考え続けたこの数年は、充実した短い期間であった。ヒマルチュリからの継続にこだわりつつも幻想と憧憬のマカルーは大きな希望へと変化し、８月上旬２チームに別れ成田を飛び立った。

先発隊の手際良い準備は私と石川がネパール到着後、日本で劫財をしているのと変わらない忙しさの中、陸送キャラバンを率いて村口が出発、観光省でのブリーフィング、リエゾンオフィサーの決定、換金、正式許可書の取得を済ませ、酒に溺れる時間もなくカトマンドゥー滞在５日目の朝にはドシャ降りの空港へ向かう。いつもながら今日は飛ぶのか、キャンセルなのか、はっきりしない。いらつくのはまだネパールに順化していない証しだ。雨足はいっこうに弱まらない。５時間後小さな山村の飛行場に向け14人乗りのツインオッター機は心細い爆音を上げ滑走路を蹴る。当然の様に静かだ。機外に目を向けても乳白色に染まった厚いモンスーンの雲だけで景色など何も見えない。レーダーを積んでいない有視界飛行は薄気味悪くてたまらない。

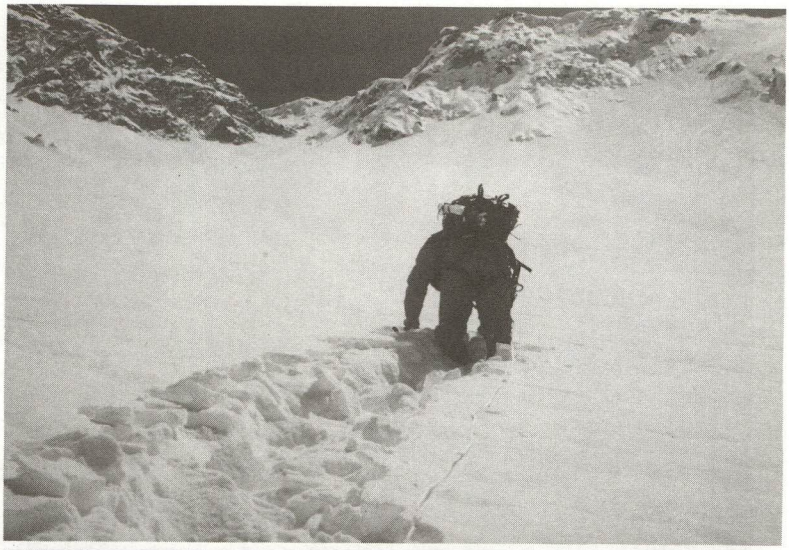
村口の率いる陸送隊３日分を１時間で飛び越え、待つ事２日、隊員、シェルパ、80ヶの隊荷が揃いキャラバンの用意が整い、やっと登山隊の雰囲気も盛り上がってくる。標高300mのここツムリンタールから4,800mのヒラリーキャンプ迄約10日間のキャラバンがスタートする。

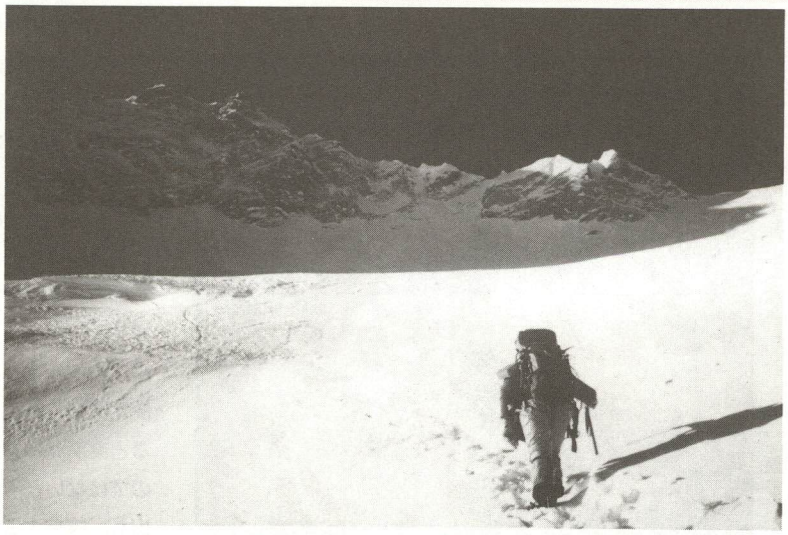
雨期のキャラバンでも時折晴れ間から見える白い峰々は辛さを半減してくれるのだが、今回はいっこうに雨は

あがらず2台持参したカメラはザックの中でカビが生えそうである。毎度のことながら吸血鬼ヒルの生息地域を抜けるとキャラバンも後半に入り、高度は上がり頭痛、ムクミ、嘔吐といった高度障害が表われ、私の日々の行動は元気な3人に最高の話題を提供したし、シェルパ達も本気で私の為の別動隊を考えた様であったが、何とか予定通り4,800mのキャンプ地にたどりついた。我々4人はこの地で順化トレーニングに数日を費やし8月31日カトマンズ出発以来17日目にしてやっとマカルーのベースキャンプ地5,300mに入る。ここはエヴェレスト、ローツェ、チャムランといった山々に囲まれた実に素晴らしい場所である。が、当のマカルーは雲の中で感動の盛り上がりには欠ける。

ようやくにこの高さに慣れつつあったある日、順化を兼ねた偵察を終え帰幕した後ブッ倒れ酸素を吸うはめに陥った。薄らぐ意識の中で「まだ始まってもいないのに最後までもちますかネ」「この先が思いやられるナ」「もともと居ないと思えばいいのサ」と天幕外で囁き合う声を感じた私であった。

9月6日はネパールの吉日にあたり、オープンセレモニー。翌7日より登攀が始まった。C1(6,000m)迄は山靴を必要としないガラ場が続き、浮石、道ロストに注意し、ハーハーゼーゼー言いながら5時間程で着く。日中は太陽を遮る物は一切なく灼熱地獄と化し42℃を記録した。初めて泊まるこの高さは順化を知るのに適していると言えよう。睡眠充分で迎えた朝の気分はなかなかいい。しかし、プラブーツを履き一歩踏み出すと身体は重くヘロヘロになり、C2(6,400m)に達し一気にBC迄下山しホッとする。それでもこ





上／マカルー・ラへのルート工作は深い雪に苦しめられた。
中／7,300m付近。　下／10月1日 第2次アタック隊 8,000m付近

◀7,800m付近より
マカルー北面

の高さは人間の長期滞在を許さぬ高さだ。もちろん目にしみる緑の樹々などあるはずもなく、視界に入るのも荒涼とした世界だ。私の天幕に1匹のクモがどこからか入ってきた。こんな厳しい条件の中で生物に会えた（?）だけで不思議な懐かしさがこみあげてくる。肉体的には休養に適さぬ高度かもしれないが、精神的には心が安らげる限界がここ 5,300mなのだろう。

4人共高所への適応は順調だし、シェルパとの会話もはずむ。彼等を単なる荷上げ要員ととらえるのではなく、時には豊富な体験に耳を傾ける謙虚さが必要であろうし、また友人として生活を共にする事にもなるだろう。キッチンスタッフ、メイルランナーも積極的にC1へ荷上げをしてくれ嬉しい誤算は大歓迎だ。

2回目、3回目の登行はそれぞれの高さを目標に、2

▲ローツェ、チョモランマ

チームのスケジュールを設定し自分のコンディションを慎重に計っていく事が最終ステージに継がる大切な期間となるはずだ。

C2迄はトレースも付きかなり楽になった。ヒドンクレパスを避けるためのフィックスロープをたぐっていけば 6,400m地点に着き、真正面に見上げるマカルー・ラ 7,400mに現在C3の建設の為の工作が行なわれている。しかし、1,000mの高度差を一日で稼ぐにはきつく、7,000m地点迄はナダレる理想的な傾斜に心は悲しい程踊り、足下より流れ落ちるスノーシャワーは登行意欲を盛り下げてくれる。嬉しいことにおまけまで付いており、斜面上部には巨大なアイスブロックがひっかかっている。あれが崩れたらマカルー北西面の地形は一変する。『C2、みんなで泊まれば怖くない!!』

9月も中旬に入る頃、マカルーの全容が見渡せる様に転向も安定してきた。真正面には西稜が天空に向かって垂直に突き上げており、左側の西壁は雪の付着を許さぬ角度で黒光りした岩肌は見る者を圧倒させずにはおかない。10日間連続のラッセルの末獲得したC3（7,400m）に各自が最終チェックの為の登行を済ませた時がアタック態勢完了の時であり、村口・山本が先行、我々も後に続く。 7,000mラインを越え呼吸はますます苦しくなり、膝迄のラッセルは疲労のペースを早め10歩進んでは数分間にわたり乱れた息を整えねばならない。この高度になると高所への適応よりも衰退の方が早いスピードでくるのではないだろうか。過呼吸の為か右脇腹の筋肉が痛み出し、咳をすると辛い。それでも自分には初めて味わう7,200mラインを越えた充実感が勝っており、先はま

だまだ長く遠い。無理はよそうと一人下山に移った。9月28日素晴らしく透き通った青空、モンスーンが明けたのか気温は下がり羽毛服を話せなくなった。昨日、村口・山本がアタックに出発して行き、今日は我々がC1をとばしC2へ向かう。居ないはずの山本がお茶を沸かして待っていたのにはビックリ。明日から行動を共にすることになった。

7,200mを越えC3迄の200mの登りは、雪崩の危険から解放されたせいかたまらなく眠かった。歩きながら数をかぞえる。20だったか30だったか、終わると膝をつき休む。ついウトウトしてくると誰もいないのに人の声でハッとして目をさまし、また歩き出す。こんな繰り返しをどの位続けたのか夕暮れ近くC3に着いた。『自分のコンディションを考えると、ここが限界かな』　2人の用意してくれた熱い紅茶がたまらなく旨く、酸素を吸いぐっすりと眠った。

9月30日。村口、アン・サルキのアタックがC4(7,800m)をスタートした。好天にも、運にも恵まれたようで今日の登頂成功はほぼ間違いないだろう。それにしては朝5時よりオープンしているトランシーバーには6時間を経過しようとしている現在になってもまだ何の連絡も入らない。頂上近くに見えるはずの2人の姿は双眼鏡を通しても発見出来ないのは、何かのトラブルか？待つのは全くいやだ。明日のアタックに向け山本、石川、シェルパ2名がC3を出発し、よけい気が滅入ってくる。C4のアタックキャンプからは行動用酸素を使用している。過去に登頂したチームのデータから算出した時間は高度差 660mを10時間以内で可能なはずで、それ以上の時間がかかる時は成功の確率は下がり、事故の確率は上がる。

11時を過ぎた頃トランシーバーに村口の声。

「エー、こちら村口。現在地約8,000。雪が深くスピードが上がらない。酸素は約半分を消費……」

『約8時間行動して稼いだ高度がたったの 200m。これでは無理だ』　直感で反射的に中止を告げるがまだ12時。この時間ではまだ下山してくるはずもなく、いくつかの言葉を交わしてシーバーのスイッチは切れた。再び長い沈黙の時間がゆっくりと流れていく。

6年前の事故が蘇り落ち着きを失っていく自分がよくわかる。ヒマルチュリで背負ったものをここにおいて帰りたい。それがマカルーに目を向けた動機であったはずだ。6年間の歳月を費やしたのも今日を迎える為であり、すでに自分は頂を目指す者ではなくなっており、ただ、ただ3人を無事に下山させる事しか考えられなかった。

午後2時を過ぎた頃、2回目の連絡が入る。8,200mの地点では頂に立てば帰りは無酸素で夜になる。中止を決める。

村口の経験でも通じなかった雪の深さ。重さ、自然の力は偉大であった。“明日こそは”の願いもむなしく再び悪雪に苦しめられた石川の姿は頂上迄 160mと迫った地点でタイムリミットを迎え、我々の登山は終了した。

2日後全員がBCに集結した。

「俺は充分満足した。君等はどうだった」と問う必要のない笑顔が私の前にあった。

もう、昨日を振り返る事なく明日に向かう一歩を踏み出そう。

◀BC

個人別行動表

行動概要

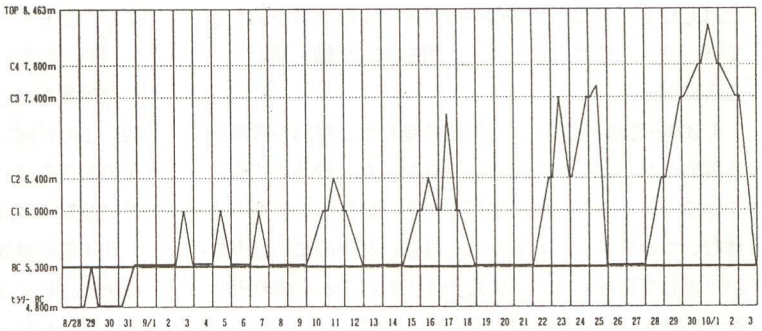
8／2　先発隊　日本出発
9　後発隊　日本出発
13　ｶﾄﾏﾝｽﾞ発　ｷｬﾗﾊﾞﾝ開始
28　ＢＣ建設(5,300m)
9／3　Ｃ１建設(6,000m)
10　Ｃ２建設(6,400m)
20　Ｃ３建設(7,400m)
24　Ｃ４建設(7,800m)
30　第1次ｱﾀｯｸ 8,200m到達
10／1　第2次ｱﾀｯｸ 8,300m到達
7　ＢＣ撤収
17　ｶﾄﾏﾝｽﾞ着

隊の構成

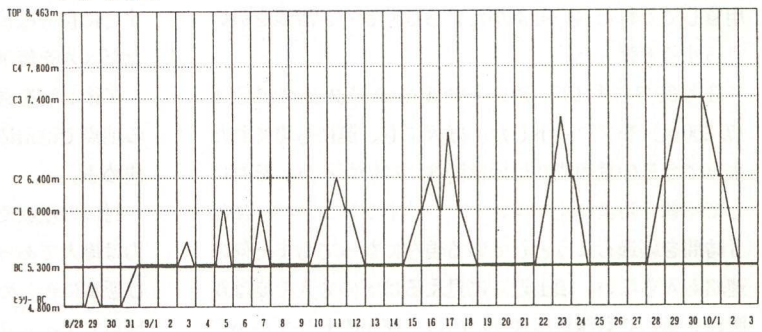
隊　長　岡田　貞夫（42才）
隊　員　村口　徳行（36才）
山本　修（30才）
石川　一郎（29才）

サーダー　ﾆﾏ・ﾃﾝﾊﾞ(36才)
シェルパ　ｱﾝ・ｶﾐ・ﾂｪﾘﾝ(37才)
ｱﾝ・ｻﾙｷ(30才)
ﾌﾙ・ｷｬﾙﾂｪﾝ(24才)
コック　ｱﾝ・ﾊﾟｻﾝ(32才)
キッチンボーイ　ﾘﾝｼﾞ・ｼｪﾙﾊﾞ(19才)
メイルランナー　ｶﾐ・ﾌﾞﾙﾊﾞ（28才）
ﾘｴｿﾞﾝ・ｵﾌｨｻｰ　ｸﾘｼｭﾅ・ｼｭﾚｽﾀ(34才)

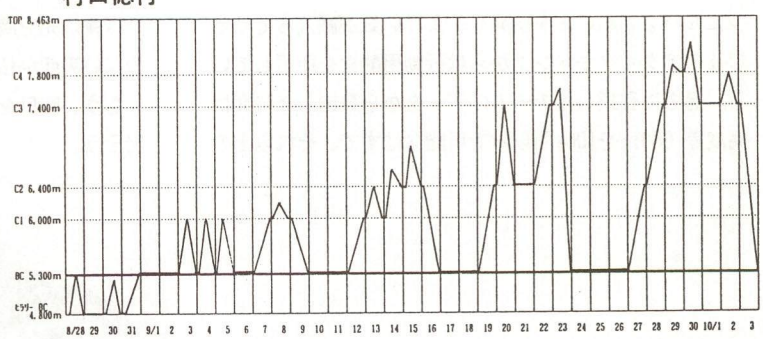
石川一郎



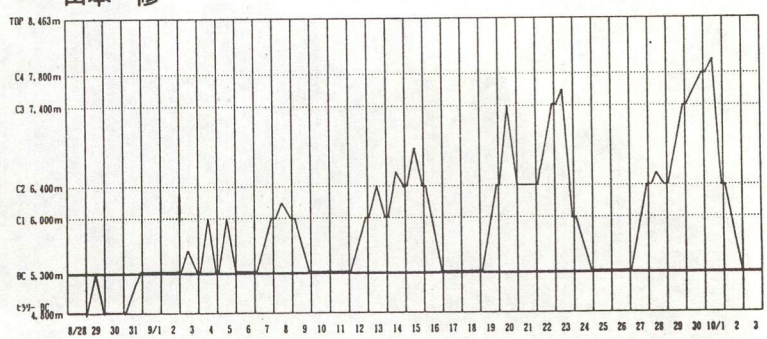
岡田貞夫



村口徳行



山本　修



寄　稿

ヒマラヤ遊覧

昭和20年電機科卒　新田　業

▲ダボスよりベルニナへ 乗換駅フィリジューにて 1993.1.20

それは5月の桜門山岳会の総会に久しぶりで顔を見せたヒマラヤ観光開発の宮原社長から、今年は名古屋から日航のチャーター直行便を3便計画しているので、空きがあればＯＢの諸兄を特別料金で招待するとの話しから始まった。

その後、7～8月の雨期の悪天候の中で、タイ航空、パキスタン航空定期便がカトマンズ空港の着陸に失敗、北側と南側の山に衝突する事故が続いて起こり、チャーター便の運行は中止になった。

しかし思い立ったら止められない70才前後のＯＢ４名は、今年行かなかったら、来年はどうなるか判らないと、香港乗り継ぎ便でも出かけることに決めてしまった。

二度あることは三度あると、心配する家族をモンスーンが明ければ視界良好、何も案ずることはない、と説得し10月27日香港乗り継ぎでカトマンズに飛び、現地時間の22時に無事空港に到着し、宮原君の出迎えを受け、ホテルヒマラヤに投宿した。

10月28日

車とガイド付きでのカトマンズ市内見物に一日中走り回った。

南北を2,700mの山々で囲まれた標高1,300mの盆地は亜熱帯に在り、温和な気候に恵まれている。

丁度雨期が終わり、晴天が続き始めたときで、前山の北側には純白に輝く巨峰群が頭を覗かせている。

南北19km、東西25kmの盆地の中心が最大の都市カトマンズで、南にパタン、東にバクタプールがあり、これが3大都市を形成している。

14世紀まではそれぞれ独立した王国であり、戦争を繰り返したため、人口不足となり、寺院の方丈に男女交合の木彫りがあるのも、戦時の出産奨励のためと、ガイドの説明であった。

それぞれの都市の広場に面して旧い王宮や寺院が有り、精巧な木彫りを施した門や窓が赤煉瓦の3～4階建ての建物を飾っている。

旧い寺院は一部が店舗になったり、全部が喫茶店になってしまったのもある。赤煉瓦の民家の立ち並ぶ通りに面して、間口一間ぐらいの小さな店が道路まで競い合って品物を並べ、人通りも多く非常に活気がある。

大きな辻には美しい小祠があり、道端の真っ赤な猿神像や鼠の像にまで花や灯明が捧げられ、信心深い庶民の生活がみられる。

荷を運ぶ農民らしい人々は大抵裸足で、良くてサンダルを履いているぐらいだが、女性の衣装は非常にカラフルで美しい。

人々の風俗が珍しくて写真をとっても、両手を合わせて「ナマステ」と挨拶すると、笑顔で同じ挨拶を返してくれる。

私達からは貧しく見えても、信心深く、それぞれの暮らしに満足している様に見える。

中世と現代が、ヒンズー教とラマ教が、そしてインド系とチベット系の多様な住民が一体となって生活しているこの都市は、もう一度ゆっくり訪ねてみたい不思議な魅力に満ちている。

10月29日

今日はヒマラヤへ飛ぶ日。好天に恵まれ遙かに純白に輝く連峰も昼頃には盆地に立ち込めたスモッグで見えなくなった。車の排気ガスが原因らしい。

朝から国内便の待合室に詰めたが、何時に出発できるのかさっぱり情報がない。午後2時頃やっと飛ぶ許可が出た。

軽便強力で定評のあるピラタス・ポーター機は 200m も滑走すると8人を乗せて簡単に飛び立った。

ヒマラヤの南側を東に向かって飛ぶから、北には白銀

▲朝日に輝くエベレスト、ローツェ、アマ・ダブラム

が輝く連峰が次々に顔を見せる筈だったが、雲に隠れて姿を見せない。

空から見るネパールは全くの山また山、その稜線まで何処も段々畑で「耕して天に至る」の趣がある。それも東に行くに従って谷はますます深く、尾根はますます高く、耕地が殆どない荒れ地が続き、最後に高度 3,500m の峠を越えると左に方向を転じドゥドゥ・コシ沿いに北上する。右下にルクラの飛行場が見える。

谷に向かって傾斜した砂利敷きの 500mばかりの簡単なものだが28人乗りの機が離発着できるそうだ。

機は雲の下辺をかすめ、ナムチェ・バザールの上の棚に向かう。大きく旋回してナムチェの上に出ると、摺り鉢の縁から底を覗く具合に階段状に続くナムチェの村が見え、そのまま高度を下げ砂利の坂に向かってガタガタと着陸した。ここはシャンボチェ、高度3,900mである。私達と入れ違いにルクラに下った筈の宮原君が迎えてくれた。至極軽便な飛行場も大岩を砕いて平地を作るには大変な苦労をしたらしい。

私達の頭上 500mくらいが雲の底で、見えるのはドゥドゥ・コシになだれ落ちる急斜面だけである。人間なら転げ落ちる程の急斜面に網の目のようにヤクの踏み跡がついている。ここで平気で草を食んでいるヤクの平衡感覚は大したものだ。

30分くらいで行ける丘の道を1時間半かけて、高度順化のためゆっくり歩く。途中、休憩のとき出された熱い紅茶の旨かったこと。

我々が夢にまで見たエベレスト。それは劇的な出現であった。

東北面に大きなガラス窓のあるロビーで茶を飲んでいると、叫び声が上がった。夕暮れ前の一刻、ゆっくりベールを外すように雲が薄くなり、ローツェの稜線の上に黄金色に輝くエベレストの頭が先ず現われた。皆、寒さも忘れてテラスに飛び出し、シャッターを切った。我々を歓迎するかのように雲はどんどん薄くなり、東へ退いて行く。ローツェとローツェ・シャールが、続いてドーンとアマダブラムが意外に近く、その怪異で迫力に満ちた全容を現わし始めた。振り返ればクワンデを間近に、ロールワリンの山群が夕日に黄金の輝きを見せて頭上に迫っていた。何たる幸運、何物にも代え難い荘厳さに誰も言葉もなく立ち尽くした。

10月30日

今日は快晴。先ずクワンデの削ぎ取った様な岩壁が金色に輝き、振り返ればエベレストもローツェもモルゲンロートに輝く荘厳な幕開けだ。

10時頃からクムジュン散策に出かける。そこから見るアマダブラムはいよいよ迫力を増し、逆光にヒマラヤ襞を輝かせるタムセルクや、その背後に怪異な雪の頭を覗かせるカンテガの凄さには神々の宿る山と言う気持ちになってくる。

この日も午後はジェット気流による雲のベールが覆い、夕刻近く静かになった時、再度の幕開けを演じてくれた。

これ以上の景観、これ以上のはなむけが他にあるであろうか？　食事も旨く、夜は湯たんぽまで入れて貰ったのに、高山病の気配が出て、手足が冷たく、頭痛で眠れなかったが、宮原君の手当てで酸素を1時間程吸って安眠できた。

10月31日

ピラタス・ポーター機でカトマンズに戻り、半日ばかり市内を散策して、ホテル・ヒマラヤに泊まる。

11月1日

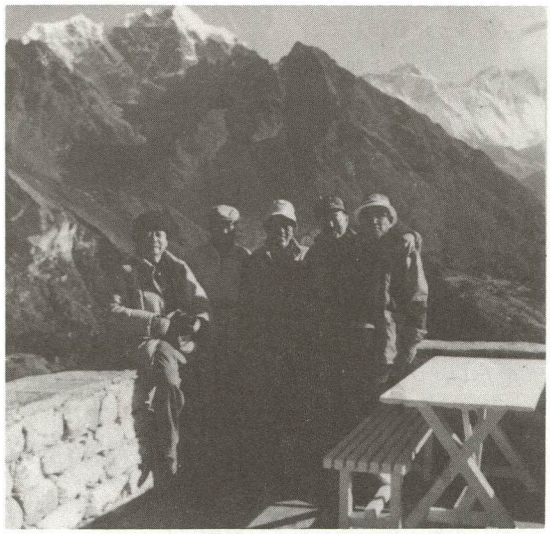
50人乗りの双発機でポカラに飛ぶ。マチャプチャレを前面に居並ぶアンナプルナ山群と、これを背景にしたポカラの街も静かでなかなか良かった。

特に2日目の早朝に上ったサランコットの丘からのアンナプルナ山群の眺めも壮大であったが、あのクーンブ・ヒマラヤの迫力には一歩及ばない気がする。

〔費用〕払い込み 450,000円　　現地 45,000円

〔追記〕終始一番元気だったのは最年長の田中さん独りで、残る渡辺、安田、新田の3人はポカラに移ってから水あたりで、だいぶ痛い目に遭いました。

すばらしい機会を提供してくれた宮原社長に深く感謝しています。



▲ホテルエベレストビューにて1992. 10/31

悔しかったら、やってみな！

昭和59年文理学部卒　山本　修

「悔しかったら、やってみな！」

マカルーの頂から帰国したら、先輩に、後輩に、そう言ってやろうと、考えていた。

山岳部に入部して12年。初夏の徳本峠では、初めてのキスリングに四つんばいになった。夏の立山東面の雪渓訓練や岩登りでは、四方から先輩の叱咤する声を浴びせられた。そして、秋の谷川岳の沢登りでは、遂に落ちた。3本の前歯を欠いたうえに、腰を強打して歩けなくなった私は、先輩に担がれて山を下りた。

それにも懲りず、冬の白山へ行った。春の黒部にも行った。毎日のようにバテた。何度も、何度も辞めようと思った。2年になっても、相変わらずだった。新人の1年にしてみれば、頼りない上級生だったことだろう。

その私が何の間違いか、ヒマラヤ遠征に参加をしている。しかも、目指すは世界第5位の高峰、マカルーだ。

「自分が行くべき山でもないだろう」

「自分よりふさわしい人間が他にいるではないか」

例えば、

「これからの人生は、ヒマラヤ遠征だ」

と現役部員に公約をして、卒業していった先輩。

「僕は、絶対にヒマラヤに登りたいんですよ」

と私に常々、訴えていた後輩。

学生時代の実力から考えれば、私以上の適任者は、いくらでもいそうなものだ。

非力で冷めていた私は、山にのめり込むこともなく卒業を迎え、大それた夢も見ることなしに就職をしていた。

その私も1年後には、思いがつのり退職を決め、中国の 6,000峰の遠征に参加をした。それからは再就職もせず、アジア、アフリカを放浪したり、アルプスやアンデスにも出掛けた。アンデスでどうにか2つの 6,000m峰に登れたことで、ようやくヒマラヤの 8,000m峰が具体的な目標になる気がした。

時間に融通の利くOBとなった私は、クラブの合宿にリーダーからよく誘われた。

「劣等部員だった自分が出なくても、よいだろう」

とは、思いつつも部員不足、リーダー不足に悩む現役部員を、1週間でも2週間でもサポートできるのは、自由な身である私だけだった。

それにしても、私より山について、クラブについて熱っぽく語っていた先輩たちは、後輩たちはどうだ。あれだけ、頻繁に山に通っていたのにいざ就職をし、結婚をすれば、クラブとも疎遠になるようだ。

会社に、家庭にどれだけ束縛されているというのだ。疑わしいものだ。意志があるのなら、もっと自分自身をコントロールできるのではないか。結局、私は青年期の熱病にうなされていた先輩たち、後輩たちのうわ言を聞いていたのに過ぎないのか。

マカルーに登頂して、
「山本は、いいよな。時間が自由で…」
「山本さんは、いいですよね。独身だから…」
なんて先輩や後輩に未練がましく、あるいは皮肉のように言われたら、こう言って気合を入れてやろう。
「悔しかったら、やってみな！」
かたくなな私は、挑発と解釈される言葉を用意して、マカルーへと旅立った。

しかし、マカルーの頂は、やはり遠かった。それなりの勝算もあったが、私は学生時代のままに非力だった。ヒマラヤの 8,000m峰に初挑戦で登れる、幸運な男でもなかった。

あれから1年、私も今では就職をしてサラリーマンとしての日々を過ごしている。サラリーマンをなめてかかったきらいもあるが、毎日をスケジュールに追われ、高所にいるかのような息苦しささえを感じている始末である。

こうなってしまっては、先輩たち、後輩たちを批判することもできなくなってしまった。あれだけ熱心だったコーチ会にも出席することはなくなり、もう半年以上、ハイキングにさえ出掛けていないのだ。

自分自身をコントロールするなどということには程遠く、仕事に振り回されているだけの毎日である。挙げ句に、週末になっても持ちかえった仕事しているか、ごろ寝をしている有り様である。

「悔しかったら、やってみな！」

この台詞は、自分自身に投げかけることになってしまった。仕事、仕事の生活も今までとは随分と勝手が違って、メリハリが効いてそれなりに充実感もあるが、それだけでこれからの人生を満足させられる自分でもないだろう。

マカルーに再挑戦できる日は、巡ってくるだろうか。いや、その前にとにかく 8,000m峰の頂上を手中に収めたい。できればスケジュールを調整して6,000m～7,000mの山にも、2～3週間の予定で行ってみたいものだ。

マカルーに出発する1年前から、今までの自分にはないほど、トレーニングには真面目に取り組んだ。しかし、圧倒的な体力もない私が 8,000mで行動するには、高所での経験が多いとは言えなかった。

暇な時間を誰よりも持っていることだけが取柄だった私が、これから山に向かうには、今までにない努力もしなければならない。まず、最初に時間を創りだすことである。

「悔しい」と思い続けることが、できるだろうか。

先日、感動に値する敗者を観る機会があった。サッカーのワールドカップ・アジア最終予選、日本は対イラク戦の試合時間残り数十秒で本大会のアメリカ行き切符を逃してしまった。

その結末が劇的であり過ぎた故に、カズやラモスなどフィールドに座り込んで身動きの取れなくなってしまった選手たちは、美しくさえあった。

敗者にとっての二つの選択肢は、立ち去るのか、再び立ち向かうのかである。彼らの多くは後者を選ぶだろう。彼らと比肩できるような私でもないが、自分なりの挑戦はするつもりだ。
「悔しかったら、やってみな！」
「無理を承知で、やってみな！」
と、爆風スランプのサンプラザ中野も数年前に歌っていたな。

（1993年12月 記）

◀7,600m付近にて

追　悼

追悼 武藤正弘君

昭和８年専機卒　皆川　四郎

「武藤遭難した手配頼むすぐ前川渡にこい」至急電報。冬休みになる数日前のことだった。武藤達はスキー合宿の前に、乗鞍岳スキー登山に行っていた。在京の人達は急ぎ駆けつけた。長髪、色白の美青年、飄々として無口、ちょっと猫背で頑張りや、そして酒豪、越後生れでスキーの名手の武藤が遭難とは……。

前川渡に降りて来た彼「俺の後からついてくると思っていたら、誰もいなかった。多分迷子になったのだろうと思って、無人小屋で待っていたら、いつの間にか、夜が明けた。皆、集まってくれたので、スキー合宿が早くなってよかったなぁ」　自分が道を間違ったことなど、棚に上げていた。60年前の出来事でした。

スキーによらず、山登り、岩登りはいつも先頭で勇猛果敢、ちょっと猪突のところもあった。専工山岳部の部報（謄写版刷り）を窪田のお寺の本堂で作っていたとき、彼「カムチャッカ遠征計画を作ろう」と言い出した。大きな夢があった。戦争が始まるまでよく山行を共にした。

齢70才の頃、窪田のはからいで初見先輩と共に、浅草で私達（窪田、武藤、森、皆川）と会食をした。今日は野を越えの部歌、オータネンバ、安曇節を歌って、楽しいひとときを過ごした。これが顔合わせの最後になってしまった。

▲1931年（昭和６年）11月１日　三ツ峠岩登り練習
（右より）武藤正弘氏　西山 毅氏　櫛引鉄太郎氏
森 泉氏　浜田国松氏　菊地定男氏　窪田宗英氏
皆川四郎氏

武藤は窪田和尚の檀家になって、同じ墓地に眠っている。さかずき片手に、一杯また一杯とやって、明日の旅路が気にかかると歌いながら、俗界の仲間を待っているだろう。　（1994年１月15日）

都築力雄先輩を偲んで

昭和37年生産工卒　高橋　正彦

都築先輩といっても、多くのＯＢ諸氏はご存知ないと思います。それも無理からぬことで、都築先輩は小生が中央仮設鋼機株式会社（現・中央ビルト工業株式会社）に入社したときの代表取締役社長でありました。当然のことながら、新人社員の小生にとっては雲上人で個人的に話しを出来る筈はなく、ただ漠然と日大出身ということで親近感を持って過ごしてまいりました。

それが、昭和45年に当部のヒマラヤ遠征隊（シタ・ツツラ）に参加するため４ヶ月の休職願いを出した折りに、「高橋君、お茶でも飲もう」と声をかけていただき、お話ししたところ、「初見君は元気かね」とか、いろいろ当部のことに詳しく、「山岳部の連中と槍ヶ岳に行った」とか、昔を懐かしむようにお話しをされました。社内の一部には「会社の業務を投げ出して、病気ならいざ知らず、遊びで４ヶ月も会社を休むとはケシカラン」という空気がありましたので、小生はこれは幸いと会長（当時は会長になられていた）に「桜門山岳会に入っていただけませんか」とお願いしたところ、快く承諾いただき、それを機会に名簿に載るようになったものです。これで、小生のヒマラヤ行きは百万人の味方がついたのも同然ですから、仕事の心配は何一つせず、ヒマラヤに専念することが出来ました。

それにつけても、小生の父も明治生まれだったせいなのか、それとも昭和の初期という時代がよかったのかわかりませんが、故清田部長、故初見先輩といった大先輩

の若かりし頃のお話しを伺うと、大学生が少なかったこともあるかも知れませんが、おおらかで屈託がなく、心が洗われるような思いをしたことは2～3度ではありませんでした。

話しを本題に戻しますが、都築先輩は明治42年11月3日に東京で誕生され、昭和8年3月に本学の工学部建築学科を卒業されました。卒業後、浅野物産株式会社に入社され戦後の混乱期の昭和26年3月に前身である中央商事株式会社を資本金50万円で設立されました。この設立にあたって、『中央仮設十年の歩み』（昭和36年刊）に当部の故三浦義明先輩を恩人の一番目に挙げられております。それの一部を転載しますと次のように語られております。

『恩人群像　－護り立ててくれた人々－（一）

三浦義明（江戸川製紙株式会社工務部長）

昭和26年3月7日、中央商事の設立に当たって50万円の資本金の一部は江戸川製紙の代金を当てる予定であった。－中略－　当時とすれば一介の納入業者が納めて、その翌日にオール現金でいただく、そんな安定した経済事情ではなかった。－中略－

この事情に特別に配慮してくれたのが三浦工務部長であった。－中略－

当氏は友として、当然の処置だと云うかも知れない、私はもっと深くその友情に感謝している。』

と述べ、三浦先輩の配慮がなかったら会社設立のチャンスは逃したであろうと語られております。

この会社設立後の都築先輩の活躍は目覚ましく、日本の建設業界における建築足場、及び各種工法の鋼製化に尽力された名実共に第一人者であります。現在では建築に従事している方なら知らない人がいない、パイプサポート、足場の繋結金具であるクランプを発明し、それを生産、販売し、一般に普及されました。各界からの発明賞、奨励金、表彰状は枚挙にいとま無く、昭和36年12月に建築技術の発展に尽力されたことにより紫綬褒章を受章されました。当然、企業としても急成長され、創立10年にして株式市場では電機のソニーか、建設の中央仮設か、と優良会社として、経済紙に載るまでにされました。しかし、これでうぬぼれてはいけないとも、諌められてもおられます。

この都築先輩の残された業績は、神武以来、建築足場は丸太を使用してまいりましたが、戦後の日本国土の荒廃から森林を守る面からも、建築現場に於ける安全性の向上の上でも、まさに画期的な発明でありました。今でこそ、その業界のミッションが西欧に行って、西欧からは学ぶべきことは何もないという方もいますが、それは都築先輩に負うところが多いと言っても過言ではありません。

一方、仕事の合間には川柳をたしなまれ、ペンネームも鷹児とし、本格的なものでした。小生もヒマラヤへ行く折りに一句いただき、感銘したのを記憶しております。このようにロマンチストであり、風流人でもあられました。

平成4年5月頃から体調を崩され、食道癌で平成4年9月10日に亡くなられました。享年83歳でありました。平成4年10月8日に信濃町の千日谷会堂でおごそかに社葬が行なわれました。鋼製仮設の一つの時代の終わりを告げましたが、都築先輩の残された功績は永く歴史に残ることと思います。

ご冥福をお祈り申し上げます。

（1993年3月26日）

平野隆司君を偲んで

昭和45年経済卒　原田　洋

昭和44年度山岳部を卒業（大学は農獣医学部を1年余計に在籍したが）、同年にシタ・ツツラ遠征を初め、ヤルン・カン（日大隊）、日本山岳会のカンチェンジュンガ、また日中合同隊の未踏峰ナムチャバルワ登山計画にも参加、1992年12月に他界されるまでヒマラヤの高峰に情熱を燃やしてきた。

山岳部に入部した時から常に一年先を見て登山の基本、組織とはどう在るべきかを考え、また過去の山岳部史を引き、繰り返し勉強していた。物事の基本を大切にしな

がら思い切った計画の発想をし、個人の実力・考え方を鋭い目で見る洞察力の中で消化していた。

私の様な凡人から、常に考え行動している平野君を見ていると彼自身疲れるのではないかと思うくらいであったが、事実身体の不調を訴える前はかなりのハードスケジュールをこなしていた。社会人になってからも、仕事と山への情熱を持ち続けることが如何に厳しいか考えさせられる。

1年前の3月下旬、数名で安達太良へ山スキーに行く予定であったが直前に身体の不調を訴え、即入院することになった。検査した時点では誰もが膵臓癌とは想像しなかったが最悪な検査結果となった。それから約8ヶ月、本人、家族にとっても最も辛い日々であったと思う。寒さが増すにつれ状態も悪化していったが、最後まで家族・友人を気遣っていた。

死を目前にして彼は（グリーンランドに居る大島君を除き）会いたい人には全員会えたと言った。幸福な男である。

冥福を祈りたい。　　（1993年3月）

平野君との思い出

昭和45年商卒　樋山　規夫

28年も前のことなので定かな記憶ではないが、小生が山岳部に入部して新人歓迎山行も終わった頃であったように思います。当時、初夏合宿までは下高井戸の文理学部で1年生全員と上級生数名でトレーニングをしていました。

ある日、小柄で色が黒く、おそろしく足の速い人が入部してきました。それが平野隆司君でした。彼は高校時代から山岳部に席を置き、その年の五月の連休も谷川岳一の倉へ行っていたように話していました。

山岳部の人が皆そうであったように、彼もまた、学生生活の中でクラブ活動の占める割合が非常に大きかったように思います。特に彼の場合、1年生の中心的存在となり、合宿中はもちろん、都会での生活においても我々をリードしてくれました。当時新宿の「メキシコ」という喫茶店が我々1年生の溜まり場となっており、彼の提案で駄弁ノートが1冊置いてあり、時間を作ってはよく通ったものでした。

丁度その頃だったと思います。部室へ行く前にお茶でも、と思いメキシコへ行った所、彼とばったり。何を話したかは今となっては定かではありませんが、意気投合、クラブもさぼり、隣の地下にある「カブト」という居酒屋へ。それ以後、この地下が我々4人の溜まり場となりました。お固い先輩方には、信じられないことでしょうが、週何回というくらい、山の話しを肴に酒を飲み、熱っぽく話し合ったものです。1、2年生の頃は幼稚な話しが多かったように思いますが、その中から後のヒマラヤ行の夢が生まれて来たように思います。

4年間の山岳部生活も平穏に過ぎたわけではなく、学園紛争の影響をもろに受け、部室にも入れず、新宿の山口先輩の離れを部室代わりに借りての活動でした。

しかし彼はそんな異常事態の中にあっても、リーダーとして常に山岳部の運営に頭を痛め、4年の春山を最終目標として、学生による海外遠征計画を立案（理事会に於いて否決され中止）。これがきっかけとなり、山岳部の中にヒマラヤ研究会なるものが発足しました。高橋ＯＢが学生の面倒を見てくださることとなり、後のシタ・ツツラ遠征へと発展していきました。

普通、社会人になってからの付き合いとなると、同期及び前後1年くらいまでの岳友になってしまう人が多いようですが、彼は友達を非常に大事にし、日大山岳部はいうに及ばず、ＪＡＣ、他の大学山岳部、町の山岳会と広範囲にわたって山仲間の付き合いがあり、普段の生活の中でも仕事と趣味を両立させ、両方とも一生懸命であり、相当無理をしていたのではないでしょうか。

本人に言わせれば、“充実した一生”というかもしれませんが、小生から見ると忙しくもあり、駆け足の人生であったように思えてなりません。残念です。

冥福を祈る次第です。　　（1994年1月）

櫛引鉄太郎さんの思い出

昭和８年専機卒　皆川　四郎

出会いは三崎町の部室でした。もう62年前のことです。明治生れは少なくなりました。山岳部員３年間は短い月日でしたが、私には一生涯の長い糧になりました。

初めて会った先輩の初見さん、西山さん、そして櫛引さんは立派な風格の人達でした。新入生の私達（窪田、武藤、森）に折にふれ山登りの醍醐味を話してくれました。私はもっと山を知りたくて、大島さんの“山”、辻村さんの“スウィス日記”、板倉さんの“山と雪の日記”など読み耽けました。今でも本棚に色褪せて残っています。

思い出すのは、三ツ峠の岩登りで、懸垂下降の訓練をしたときの出来事です。数回まで何事もなかった、ザイルを確保していた大岩が、突如動きだしたのです。吃驚仰天、多分大声をあげたのでしょう、側にいた鉄ちゃんが“大丈夫だ”と云って、とっさに石の楔を差し込みました。臨機の処置でした。惨事の一歩手前でした。ああよかった。何も知らない宙吊りの仲間の“早く降ろせ”とどなる声が聞こえてきました。冷や汗のひとときでした。こんな苦い経験をしたのに、翌年にはリーダー気取りで、下級生を一ノ倉沢に連れて行きました。先輩を見習う使命感があったのでしょうか。

鉄ちゃんから、穂高でピッケルの使い方やグリセードを、南小谷や熊の湯ではスキーを、白馬ではアイゼンを、雨の日にはテントで安曇節の特訓を受けました。

山のよさ、楽しさ、恐ろしさを知ることができたことを感謝しています。

齢80才を越えた今日も、富士、上高地、尾瀬とビデオカメラにおさめ、楽しんでいるのも先輩のお陰です。

ご冥福を心からお祈りします。　（1993年10月）

武藤　正弘氏　平成４年１月12日
都築　力雄氏　平成４年９月８日
平野　隆司氏　平成４年12月10日
櫛引鉄太郎氏　平成５年１月25日

▲1931年（昭和６年）５月　木代不二夫氏追悼ザイル祭

登山計画の近況

（桜門山岳会会員）

ダウラギリ主峰登山隊1994

登山隊名称

シルバータートル・ダウラギリ主峰登山隊1994

目　　的　北東稜からのダウラギリ主峰の登山

期　　間　1994年8月下旬～10月中旬

隊の構成　隊　　長　石川富康　シェルパ　10名

隊　　員　8名　コック　1名

リエゾン・オフィサー　1名　キッチンボーイ　2名

サーダー　1名　メールランナー　1名

25名

隊　　長　石川　富康（58歳）

メンバー　大城　泰（59歳）　池田　錦重（56歳）

根津　皖一（55歳）　小西　政継（56歳）

遠藤　京子（56歳）　渡辺　玉枝（56歳）

三浦　充徹（53歳）　北川みはる（50歳）

予　　算　9,000,000円

行動予定　1994年8月22日　先発隊日本発

27日　本隊日本発

30日　カトマンズ→ポカラ

31日　キャラバン出発

9月4日　マルファ到着（2,800m）

10日　BC建設（4,650m）

10月5日　登頂

14日　マルファ下山

16日　カトマンズ着

17日　帰国

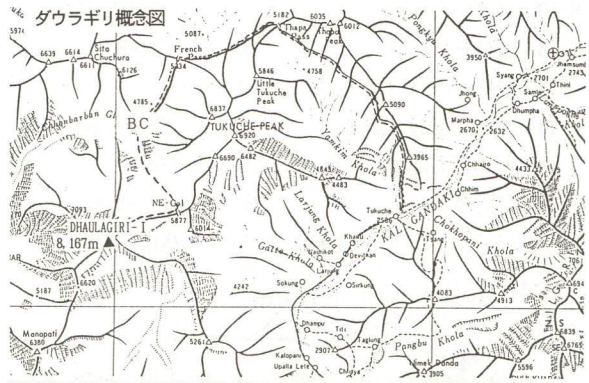
主　　旨

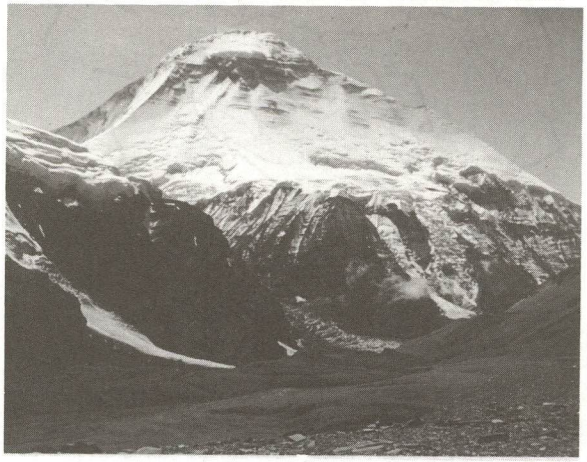
「いくつになっても登りたい……」この一言で1991年秋に世界第6位の高峰チョー・オユー峰(8,201m）の頂に、あるいは8,000mの高所に、各隊員は様々な思いをこめて登山をしてきました。この体験から、我々中高年齢者の登山活動が、世界の高峰に拡がってゆくのを感じながら帰国した。そうした中で、我々の次なる山に選ばれたのがダウラギリ主峰(8,167m）です。この山は世界で初めて8,000mのアンナプルナ峰に登頂したフランス隊が1950年に試み、その後、7隊による挑戦のあと、1960年にスイス隊により北東稜から初登頂された。今では、数々の登山隊が様々なルートから登頂しております。今回のルートは北東稜から頂をめざし、体力、技術、実力に合わせ登山を楽しんできたいと思います。

（同人シルバータートル・ダウラギリ登山隊）

今回の計画はチョー・オユーが終了と同時に、なんとなく簡単に登れてしまったチョー・オユーの登山に対して(これは、もしかすると酸欠状態だったかもしれない)、もう少し実感のともなった8,000m峰の登山をしてみたいと言うことで考えはじめ、それと我々サラリーマンは100万円位で8,000m峰の登山を実施したいとの考えで、出発した。1991年暮れに骨組みができ、1992年春に隊長をかつぎだし、秋に申請を出し、93年6月にやっと許可を受け取り、暮れから準備に入った。やはり、海外の登山はなんだかんだと言っても、行くまでに3年はかかってしまいます。

（池田 錦重）





▲ダウラギリⅠ峰

マッキンリー登山隊1994

主　　旨

チョモランマ計画の過程として、主に高所未経験者や学生を対象に 6,000m台の高所経験および氷河の登攀を訓練する。

登山隊名称　日本大学マッキンリー登山隊1994
目　　的　ウエストバットレスからの登頂
期　　間　1994年6月12日～7月1日
参加予定者　平山　善吉（日本大学山岳部長　建31卒）
深瀬　一男（桜門山岳会　電33卒）
田端　宏好（桜門山岳会　文H4卒）
行本　嘉男（歯学部山岳部OB）
原田　智紀（医学部山岳部OB）
芹沢　浩正（日本大学山岳部　商２年）
中澤　公彦（日本大学山岳部　文２年）
須藤　　聡（日本大学山岳部　文１年）
郡山工学部山岳部より３名
予　　算　１人 約350,000円
行動予定

6/12　東京→ｱﾝｶﾚｯｼﾞ
13　→ﾀﾙｷｰﾄﾅ
14　→LP→仮ｷｬﾝﾌﾟ(2,600m)
15　→BC(3,200m)建設
16　BC-C1(4,200m) 往復
17　C1建設
18　C1-C2(5,200m) 往復
19　C2⊃登頂(6,194m)
20　C2→C1→BC
21　BC→LP
22～26　予備日数
27　LP→ﾀﾙｷｰﾄﾅ
28　ﾀﾙｷｰﾄﾅ→ｱﾝｶﾚｯｼﾞ
7/1　ｿｳﾙ経由→東京着

チョー・オユー合宿1994

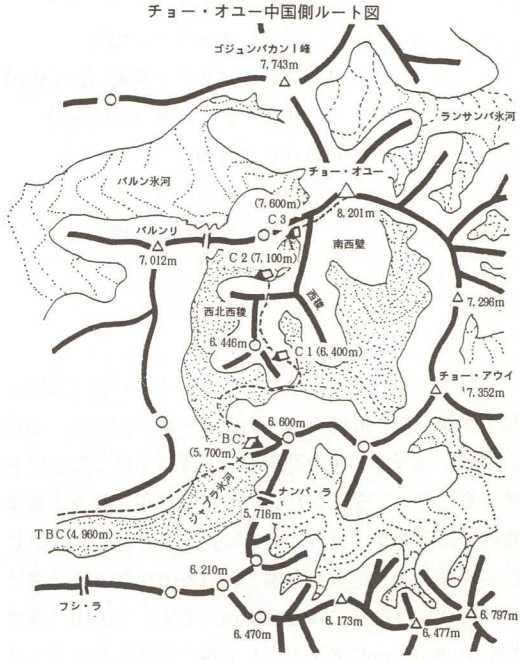
主　　旨

比較的短期間で実行できるチョー・オユーで高所トレーニングを行い、来春計画中のチョモランマで即戦力となりえる 8,000m経験者を育成する。また、ＢＣより１日で行けるチョモランマＢＣへ偵察隊を派遣する。

期　　間　1994年９月１日～10月10日
隊　　員　６～10名
行動予定

9/1　東京→カトマンズ
4　→コダリ／ザンムー
5　→ニエラム
6　ﾆｴﾗﾑ滞在（高所順応）
7　→シガール
8　→ＴＢＣ(4,960m)建設
9　ＴＢＣ滞在
10　〃
11　→仮ｷｬﾝﾌﾟ(5,300mｶﾙｶ)
12　→ＢＣ(5,700m)建設
13　BC滞在（休養・高所順応）
14　〃（　〃　）
15　BC-C1(6,400m) 往復
16　BC滞在（休養）
17　BC→C1建設
18　C1⊃C2(7,200m)
19　C1→C2建設
20　→C1→BC
21　BC滞在（休養）
22　〃（〃）
23　BC→C1
24　→C2
25　→C3
26　→登頂(8,201m)→C2
27　→BC
9/28～10/4　SP7日
10/5　BC→ｻﾞﾝﾑｰ/→ｶﾄﾏﾝｽﾞ
6　ｼｶﾞｰﾙ→ｶﾄﾏﾝｽﾞ
9　→ﾊﾞﾝｺｸ
10　→東京着

チョー・オユー中国側ルート図



日本大学チョモランマ登山隊1995

主　　旨

日本大学山岳部は、このたび創部70周年を迎えようとしています。創部以来、国内の山岳登山はもとより、海外におきましても、ヒマラヤの高峰はじめ、極地へと広範囲に足跡を残してきました。

このたび創部70周年を契機に、日本大学山岳部、及び桜門山岳会が中心となり、これに各学部山岳部とＯＢ会の協力を得、全学の総力をあげ、世界の最高峰チョモランマ峰に、日本大学チョモランマ登山隊を派遣し、登山とこの地域に学術調査を行うことになりました。

現在、チョモランマ峰の登山は1953年の英国隊の初登頂以来、多くの人々に関心を持たれ、登られておりますが、私達はこのチョモランマ北面から、いまだ未完登な北東稜からの登山を目指しております。この登山は、過去各国から８隊の優れた登山隊が登攀を試みましたが、最高到達点 8,400m付近まで達したもののいずれも頂上まで踏破した登山隊はなく、本計画はこれらの事を踏まえ、前年秋に高所トレーニング登山を計画するなど万全の態勢を整えて、翌春、本隊の派遣を計画しています。

私達はこの登山を、次世代へのメッセージを込めた計画として期待をかけております。

登山隊名称　日本大学チョモランマ登山隊1995

［英文］NIHON UNIV. Mt. CHOMOLANGMA EXPEDITION 1995

［漢文］日本大学珠穆朗瑪峰登山隊1995

目　　的

(1) 世界最高峰チョモランマ(8,848m) の北稜および未踏の北東稜からの登頂。

(2) ヒマラヤの関する学術調査

登 山 計 画

(1) 登山ルート

・北東稜(踏破)東ﾛﾝﾌﾞｯｸ氷河～北東稜～頂上

・北　稜(支援)東ﾛﾝﾌﾞｯｸ氷河～ﾉｰｽｺﾙ～北稜～北東稜～頂上／下山はすべて北稜ルート

(2) 登山時期

1995年３月～５月（プレモンスーン）。５月５日を登頂予定日と設定して基本計画を立案。

(3) 入山ルート

・本　隊　カトマンズ→コダリ→ザンムー→ニエラム→定日→ＢＣ

・分　隊　北京→成都→ラサ→ルクズ→定日→ＢＣ

(4) タクティクス

未踏の北東稜の末端から尾根（稜線）づたいに登頂を成功させるために北稜（ノース・コルルート）からの支援、安全確保を含む２隊で行動する。

(5) 酸素使用

登山隊の編成

(1)	日 本 隊 員	隊　長	1名	隊　員	15名
		登攀隊長	1名	医　師	2名
		ﾏﾈｰｼﾞｬｰ	1名		計20名
(2)	ﾈﾊﾟｰﾙ協力員	サーダー	1名	シェルパ	15名
		コ ッ ク	1名	ｷｯﾁﾝﾎﾞｰｲ	2名
		ＢＣ要員	4名		計23名
(3)	中国派遣協力員	連 絡 官	1名	運 転 手	1名
		通　訳	1名		計３名

学術隊の編成（検討中）

日　　程

1994年６月	第1次輸送計画完了/マッキンリー登山	
10月	チョー・オユー登山(高所トレーニング)	
11月	第2次輸送計画完了	
1995年２月20日	先発隊出発	
３月10日	本隊出発	
	順応登山	
25日	ＢＣ建設	登山期間68日（SP15日間含む）
４月１日	登山開始	
５月５日	登頂予定日	
31日	最終ＢＣ撤収日	
６月５日	カトマンズ及び北京帰着	
10日	日本最終帰国	

── 未踏のチョモランマ北東稜をめざして ──

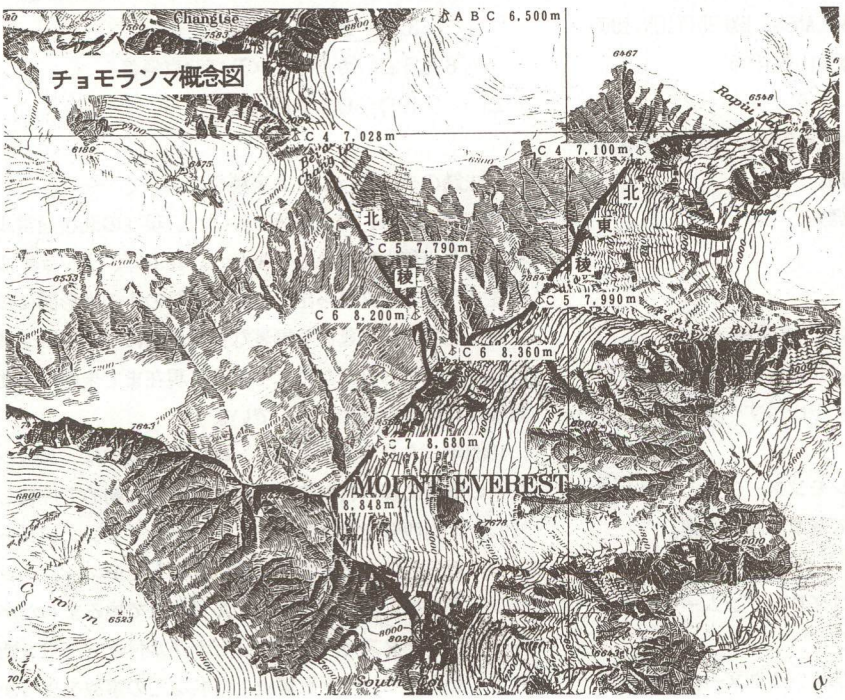
北東稜は従来、東北東稜と呼ばれ、現在の北稜通常ルートが北東稜と呼ばれていました。1991年、ナショナルジオグラフィックから出された５万分の１の地形図に頂上から北東方向に延びる顕著な長い尾根に‘Northeast Ridge”と記載されたため、その後、現在まで未踏の東北東稜を北東稜と改めて呼んでいます。

1982年、クリス・ボニントン率いる英国隊は、エベレストの最後に残された未踏の長大な尾根に初めて挑戦しました。南西壁初登攀のピーター・ボードマン、ジョー・タスカーと冬のアイガー北壁に成功したディック・レンショウを加え、無酸素・シェルパレスで挑みましたが、ボードマンとタスカーは、第２ピナクル付近で消息を断ちました。エベレスト登攀史上有名なこの事故をきっか

けに英国隊は、その後、85年（隊長＝マルコム・ダフ）、86年（隊長＝ブラーミー・ストーク）、87年（隊長＝ダグ・スコット）、88年(隊長＝ブラーミー・ストーク）と執拗にこの尾根に挑戦し続けています。88年の隊では、ラッセル・ブライスとハリー・テイラーが酸素を使って、初めて第４ピナクルを突破しジャンクションへ達しましたが、悪天候のため登頂は断念、しかしこれで北東稜のジャンクションから下の未知の部分が明らかにされた訳であります。その後1991年(隊長＝ハリー・テイラー)に国際隊が、無酸素で挑戦していますがジャンクションを越えた所で悪天候のため、敗退し北稜を下降しています。

1992年、大宮求隊長率いる日本・カザフスタン友好登山隊が挑戦しましたが、世界最強といわれたカザフ人による順調なルート工作が進められたにもかかわらず、日本人隊員１人を失い登頂は断念しました。

過去の経験から、この長大な尾根から頂上を狙うためには、無酸素やシェルパレス、アルパインスタイルでのタクティクスでは体力的に限界を越えると考えられ、ジャンクション上部の稜線上に北稜から上げたアドバンス・キャンプを建設することなしに登頂は不可能と考えられています。エベレストに残された最後の未踏の尾根は、世界中のクライマーが注目する地球上に残された数少ない価値あるルートであるといえますが、そんな困難なルートでも、登り方次第では我々のレベルでも充分可能性を見いだせる誠に興味深いルートであるともいえます。



── タクティクスの概要 ──

ＢＣ(5,100m)、Ｃ１(5,500m)、Ｃ２(6,000m)、ＡＢＣ(6,500m) を従来通り建設し、そこまではヤクを使って荷上げを行います。

ＡＢＣからは北東稜隊と北稜隊を独立させ、北稜隊はノース・コルにＣ４(7,028m)を建設し、Ｃ５(7,790m)、Ｃ６(8,200m) および北東稜とのジャンクションより上部にＣ７(8,680m) を建設して頂上アタックを狙い、その後、Ｃ７で北東稜隊のサポートを行うこととする。ただしＣ６を稜線近くに建設する場合Ｃ７は省略する。

北東稜隊はＣ４(7,100m) を建設後、Ｃ５(7,990m) までの間に１ヶ所デポキャンプを設ける。これはＣ４とＣ５間の 890mの標高差をカバーするものです。Ｃ５およびＣ６(8,360m) はノース・コルから吹き抜ける強風のため通常の高所テントでは設営が困難なことが解っており、雪洞または特殊なテントを使用することも考えられます。ここよりジャンクションまでのピナクル帯の突破が今ルートの核心部であり、いかに効率よくスピーディーに抜けるかが成功の鍵となります。北東稜隊のアタックは北稜のルート工作が終了していなければリスキーなものとなります。頂上からは、北稜隊が作ったルートを追って下降することになります。

一般に 7,000m以上の高所に滞在できる時間は４日間といわれています。つまりＣ４より上部に粘って登頂のチャンスをうかがっていても体力が消耗するだけで頂上には達する体力は残らないのです。Ｃ６建設後はいったんＢＣで休養し、天候を判断して５日間で一気に頂上アタックを終えなければなりません。アタック日を決める天候判断も重要なポイントです。

Ｃ４が建設できた段階でいったん下山し、カトマンズ（最短でＡＢＣから２日でカトマンズへ戻れる地の利を活用する）まで戻って１週間程度休養し、体力の回復を図った後、再び登山を再開することも考えています。

（古野 淳）

原稿募集

■「会報」では、皆様の投稿をお待ちしています。国内、海外、登山、紀行を問わず、身近な話題や、最新情報、評論、随想などフリーなテーマで結構です。字数の制限は特にありません。写真、地図、カットなど必要に応じて添付してください。また編集に関してのご意見、ご希望などありましたら編集部までぜひご一報願います。

■「会報」は自由な発想の場を提供できるものでありたいと思います。

■次回会報32号は、チョモランマ登山計画を中心に作製したいと思いますので、ご協力よろしくお願い致します。

原稿送り先　〒195 町田市鶴川6-7-1-408 Fax. 0427-37-7088　村口徳行宛

編集後記

■早々に原稿をいただいた方々には、発刊が遅れ大変申し訳なく思っております。また、今回もたくさんの皆様のご協力で完成することができました。どうもありがとうございました。　原田雅子

■今回の会報は予定より半年以上遅れての発行だった。原稿を集める努力を怠ったことに原因があった。毎回感ずることだが、記録が古くなればなる程、報告書としての興味は急速におとろえてくる。会報が単なる記録を残すだけのものや、質だけを追求するものならば毎年発行する必要はないだろう。山を登ろうとする人間が山登りについて真剣に考え、真摯に山行を続ける限り、そこには何か学びとることや新しい驚きがあるはずだ。

■正確で新しい情報を伝えることを第一目標として、山登りだけでなく、内容の充実したものを目指したいと思う。かたいものではなく寝ころがって気楽に読めるような会報が、当面の目標だ。　村口徳行

■会報31号編集委員　岡田貞夫／村口徳行／山本 修／原田雅子

会報 第31号

発行日　1994年4月20日

発行人　中嶋　啓

編集人　村口徳行／原田雅子／山本　修

発行所　日本大学保健体育審議会山岳部
桜門山岳会
〒102 東京都千代田区九段南4-8-24 ／(部室TEL)03-3329-5725

製　作　(有)オフィス・エム
〒195 東京都町田市鶴川6-7-1-408　TEL0427-37-7087

印刷所　豊文社印刷(株)
〒201 東京都狛江市岩戸北3-11-12　TEL03-3489-0576(代)

古野淳